

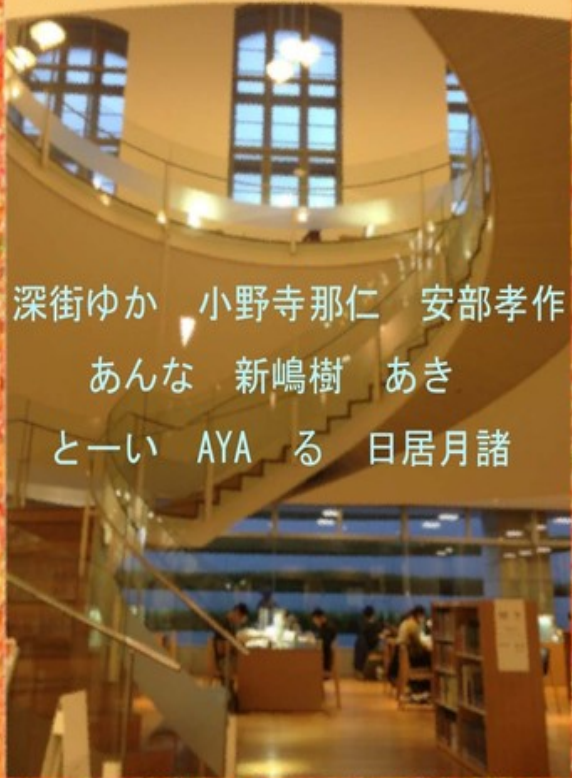
Li-tweet 2014/autumn/No.9

特集 文学的虚構を求めて

深街ゆか 小野寺那仁 安部孝作

あんな 新嶋樹 あき

とーい AYA る 日居月諸



目次

『Li-tweet』（2014 秋号）

・特集「文学的虚構を求めて」

小説「浸入」…深街ゆか……………3

小説「ジェイコブの部屋」…小野寺那仁……………11

詩「モスリン」…安部孝作……………23

小説「ビートを鳴らせ」…あんな……………27

・自由投稿

小説「鈍行にて」…新嶋樹……………43

レビュー「アレクサンドリア読解」…あき……………59

詩「しおん」…とーい……………65

・連載

小説「白い家」第一回…AYA……………68

小説「マイ・フリーツシユ・ハート」第一回…90

小説「書かれなかった寓話」第四回…日居月諸……………102

小説「合同教会の人びと」第四回…小野寺那仁……………146

小説「瞳子」(休載のお知らせ)…常磐誠……………153

・記事

.....

161

・編集後記

.....

158

・記録

.....

155

特集

「文学的虚構を求めて」

「いま、こうしてわたしの生活が西瓜糖の世界で過ぎてゆくように……」

Richard Brautigan 『In Watermelon Sugar』 藤本和子訳

文学にとって虚構とはかくも身近なものであり、写真や映画、絵画とは違い言葉ひとつで非現実（フィクション）の世界を作り出してしまふ能力を持っています。「どこまで現実から遠くまで跳べるか」というのは文学のひとつのテーマとして、主に前衛小説やサイエンスフィクションで取り入れられてきた視点であります。今回の「文学的虚構を求めて」というテーマでは部員の想像力をフル動員して今までに無い異次元を作り出してほしいと思います。

（けれど、今たっているこの現実こそが現実から一番遠いところにある場所なのかもしれません。）

それは悪い冗談を言ったあと、舌の根も渴かぬうちに（取るに足らない）などどくちにする、けれど、誰に迷惑をかけるわけでもなかったから、幼いころのわたしは父や母と、思春期を過ぎてからはともだちや恋人とそれに立ち寄って、入場券を人数分求めた、わたしは、結末のない物語に挟んでしまった葉を提供され、そしてまた物語を、と書くために商店街の雑貨店で購入した日記帳の、赤い表紙に金文字で刺繍された (diary) があまりにも少女趣味で、夢みがちの、それっぽかったということをまだ誰にも言えない、おととい封切された 「あるいはマイナス」 という映画の冒頭で湖のほとりに青くけぶった朝靄が女優の、髪やワンピースを鈍く重くして、垂直に滴り、女がポケットから出して広げた手紙に楢田のシミをつくった、そのシミはじわじわと大きくなって、映写機のレンズに付着した塵のようになる、けれど、今はもうそんな時代ではなくて（退屈することがあるとすれば、これ以前を考えたとき）と

いう字幕が不意に浮かび上がり、消え（それから、ゆっくり、昔のはなしをはなしたい）という字幕が浮かび上がる、わたしが映画館の売店で買ったジュースのストローの先端を噛みつぶしながら魅入るのは、関節を抜き取られたようなやわらかな字幕が漂わせる、何者かに飾られたようなおいで、朝靄で滲んで癒着しあった文字と文字を撫でる女優でも、その女優の腰に腕を絡ませる、伏し目がちの、眠たそうな表情浮かべる、イアンという名前の俳優でもないのだけれど。

翌日になると、細部ばかりが陽光にちらちらと、断片的に照らし出されながら舞う埃のように思ひ出されるそんな作品だった、ベランダに干している衣服がときどき風に揺れて、開け放っている縁側にさまざまな大きさの影が絡み合い、光の斑点をいくつも作り出す、いつまでも眺めていると閉じた目の裏側にまで光の斑点を作り出したりにして、眠気を誘う、わたしは、あいかわらず結末の無い物語を、際限無く誤読する

ので、などと赤い日記帳に書けば、あの字幕を模写することができなくて誤魔化せなかった抑揚に我慢ならず、破り捨ててしまう、そんな、出来事というよりは風景が印刷された絵葉書にありもしない近況を書いて、演技者であるイアンに送る、届かないとわかりきっている返事がポストに投函される音に耳を澄ますほど、未遂に終わった手紙のやりとりが半透明の午睡になる、遠くて、浅い、ねむりに滑り込む前、病院へ予約の電話をいれるために押した数字が、身体の不調を整えるものだと彼ら（劇中のイアンと女優）は知らない、だって彼らは浮かぬ顔をして湖のほとりで立ちつくす、彼らを観賞した人々の待ち合わせ場所でしかなくて、彼らはスクリーンの向こうにある眼と眼があったとき（病院）という単語を思い出す。

あの夏のイアンはジョシュという名前のごろつきを演じていて、今よりも長い髪や煙草を吸う仕事で、ミニスカートをはいたり流行の髪型で毛先が傷んだ少女たちの、恋心や敵意を引っこ抜いたりして、ありふれた台詞ばかりくちにしていたけれど、美しかった、わたしが半券を右ポケットに入れ、ほの暗い、通路側の席に座ってスクリーンを眺めているとジョシュは（取るに足らない）と馬鹿にするような口調で言うので、わたしは、たまらなくなつて映画館を飛び出し、明かりのついた家へ帰宅した、玄関で脱いだ靴もそろえずに脱衣所へ向かい、裸になつてシャワーを浴びると、よく泡立った、石鹼の泡が渦をまきながら排水溝へ流れていく、タイルとタイルの隙間にこびり付いた水垢の、ピンク色が気になつて水垢を指の先でほじくりかえしていると、電話が鳴っているのが聞こえてきた、けれど風呂場の中から聞く、こもつたような呼び鈴は、どうしてこんなに他人事のように感じるのだろうか、今は蛇口をひねつて身体を洗つたりすることのほうが電話に出ることよりも大切なことに感じる、わたしは、こんなふうに女優がシャワーを浴びるシーンを何度も繰り返し見たことがある、女優

は濡れた髪から効果的に水を滴らせ、誰もいないベッドルームへ向かう、サイドボードの上で点滅する電話機の赤いランプ、規則的に、点滅を繰り返す部分を押すと留守番電話が再生される。「わたし、あなたは（取るに足らない）のひとことを言うことができない、言えないまま夜になって、完全に明かりを消せない部屋に鍵をして逃げるように飛び出す、そして映画館の、薄明かり、列車の窓から眺める景色のような映像、物語の流れとともに、訪れを待つことになるんだわ」

その声の主がわたしであることにわたしは安心する。

病院の待合室に置かれていた映画雑誌にイアンが頬杖をついている写真が掲載されていて、その眠たそうな表情のわけは、長すぎる重たい睫のせいだと知る、最近のイアンは何も連想させないつまらない役ばかり演じているけれど、数年前に演じた男娼の評価は高かったことが手のひらほどの記事にまとめられていた、なんだったら、

その証拠をみせてもいいとイアンは女優に右腕を差し出す、体毛にうずもれた三日月のような傷跡、二人は岸边でありきたりの結末を手繰るありふれた演技者、そのていねいに整えられた眉も横顔も、風にはためく女優のワンピースも、早朝の湖の空気はひどく疼かせる、昔はそうでなかったけれど、ここは最適な場所ではない、言ってしまふなら不鮮明で（僕はつきへ行かなければならない）（イアンあなたって規則性がないのね、わたしはここで暮らしていたい）女優は人差し指をくねらせて、岸边の砂利をほじくり返し、気に入った色の小石を見つけては湖へ投げ込む、そのたびに水面のひかりが飛び散って、女優の顔にひかりを投げる（あのころのわたしはひどかった、裸になる女の役ばかりで、日記に書くことなんてできなかった、あれを自身の体験と認めるのに、そこらじゅうについた指紋を、活字になったわたしの印象を、こそぎ落とせないということを知らなければならなかったんだもの）そういった女優の流行の色に塗りつぶされたくちびるは、この映画作品で再びひらかれることなく、とぎされて、小石も投げ込まれることも無い（台本を暗記して、それをくちにする

たび僕は、露骨に磨り減っているようだったけれど、そんなのはでたらめで、最初から、在ると思ひ込んでいたものを紛失して途方にくれていただけの、演技者で、台本は、僕が演技者でない時間を作るための、僕がそれになるように誘うものと考えようになつたら、僕は僕のために眠る時間がこの世にはないことを認めなければならなかつた） イアンは女優の身体に腕を絡ませ、女優の顎の線それから鎖骨の線を鼻の頭でなぞつてから、女優の首に顔をうずめる、一番熱を持ったところ、血液が流れ、脈打つところ、みているだけのにんげんには到底わからない、演技者たちの首の線や窪み。

それから、たわんだようにしなやかな波の音に包囲されたイアンと女優の二人の影が、ジュースの空き缶や水草にまみれた波打ちぎわを、あてどなくうろついて、曇天を映す湖に音も無く沈む、淡く青いひかりを帯びた結末、曖昧すぎて批判の対象にも

ならなかったと映画雑誌に書かれていた、病院の待合室でいちばんよく陽光の差し込む窓際の長席でわたしは、親切な老婦人へのど飴をひとつ貰って舐める、舌の上で甘い唾液がつるつるとひろがって、あの映画には飲食のシーンが無かったことを思い出す、そのことは悲劇的であったのかもしれないけれど、わたしはわたしで意識的に甘い唾液を飲み込む、風邪で腫れた喉が痛む、けれどすべて取るに足りないことなので、清潔な消毒液のにおいをただよわせた看護師が患者、わたしに微笑みかける。

お気をつけて、おだいじなさい。

確か (end) という字幕がほんの少し、揺れていた。

そうして私は次の部屋の前に立つ。既に記憶は波に洗われる海辺の星砂のように跡形もなくなり非常に都合よく陶酔的な気分さえ訪れていた。ただ長く先の見えない石に囲まれた廊下だけは数時間か数十分以前と変わらず、私は自分を取り戻した気分になる。

次の部屋のドアノブをあわただしく回したくなるのはひとつにはその廊下にいつまでも居たくないからだ。うつすらと幾つかの罪を犯した感情もかさぶたほどには残っているためにせかされるような気分にもなることと警備会社からの復讐に怯えることからくる入りまじった感情からであった。次の部屋に対する興味からではない。まあ、ただ筆記体で書かれた表札のようなものには「ジェイコブ」とあり病室か何かのようでもホテルのものとは思えなかった。

例によって私はノックもせず無人かもしれないその部屋の重厚な扉を開ける。

広葉樹が、もちろん観葉植物なのだろうがいくつかあつていきなり飛び込んでくる緑に私は戸惑い警戒した。視界が覆われている。空調がほどよいのか涼しげな空気が頬に当たる。そこで私は今までの失われた感覚が戻っているのを訝しくも思うのだが。

「ジェイコブ」何故か私は大胆にも流暢な発音で声を掛けている。私は英会話を数年も続けていたのでそういった発音もできないこともないのだろうが、かつてないほど巧く言えたことには驚かざるをえない。もちろん、ずっとそれは感じていたことだが、すでに私の私に対する情報とかイメージというものが差異を起こしているのは明らかであつて今さら驚くことでもなかった。視覚的に緑色のハレーションを起こしているのだが、それは情報としても認知としても音響的にも、いやありとあらゆる物事に対してハレーションを起こしているような感覚だつた。

反応する声がなかつたので私はもう一度彼の名を呼んだ。

「ジェイコブ！」半オクターブかあげていたと思う。すると鬱蒼と茂る植物のはるか向こう側から背中を丸めたかなり年配の学者のような風貌の男が、縁なし眼鏡をずらして老眼の男がよくするようにレンズを通さずにこちらを見つめていた。彼は英語で私に何か言つた。たしかに英語はさっぱり聞き取れなかつた。にもかかわらず私は彼に向かつて歩み始めしつかりと両手で彼の覚束ないしわだらけの片手を握りしめていた。

彼は不機嫌を露わにしている。私を新米のボーイとでも思ったのだろう。もし私が警備会社の制服かホテルの金モールを施したボーイらしき衣裳を纏つていたならばいささかも不自然ではないし躊躇なく自分の意志を貫いて堂々と理不尽なことも主張

できるのであるが、そうするには私の外観はみすばらしく衣裳も雨に濡れてありきたりなジーンズにTシャツといういでたちも不信を買うには十分であった、はずだ。私は闖入者という言葉がこれ以上びったりとあてはまる状況はないほどにさまざまな条件を満たしていた。ただ言えることはこれまでの部屋でも同じようなことを繰り返してきたので今までにどんなことが起きたのかはすっかり忘れてしまったものの身体は覚えているということであった。実際このホテルはすでにボーイを雇うような資金の余裕はなく厄介者なのはこの老学者のほうなのだと思つたが何もホテルの経営陣の立場でもない私は余計なことを言う資格も何もあつたものではない。私は次の日本語が口から出てこない。何を語りかけていいのやら彼が日本語を解するのかそもそも彼が私とコミットするのを望んでいるのか推し量りかねていた。

「そりゃ、ニホンゴを話せというなら話せないわけではないが、もう随分長く使つてないんでね、まあ全く英語が出来ないんじゃない。ところで何か、事務の手続きでも変更があつたのかね？ それとも食後のデザートやコーヒーの差し入れをする氣になつたとか、或いはジャグジーが使えるようになったとか、美人の秘書が手に入るようになったとかさそういう朗報かね？ そうじゃなかったら私はあんたの相手をする氣はないんだけどね。もう何年も人とは話してないんだよ。そして今言つたことを何年も前にホテルの齋藤支配人に頼んだはずなんだが、あの人辞めてしまつたな。

定年を迎えたらしいじゃないか」

「それだけ話せたら十分です」私は彼の日本語に満足していた。うすうす非常識なことはわかっていたんだが、この人は理解のある人だと私は話を聞いて分かった。なにせ今までの住人ときたらとんでもない連中の集まりであったから。むろん、そんなふうに他者を断定する資格は私にはなく、私はますます悪い立場に追い込まれる。まさに闖入者と呼ばれるにふさわしかった。私は苦し紛れに半ば自棄になってこう切り出した。どうせ殺人まで犯した身だった。怖れるものはなにもない。だが、その記憶だけはぬぐえないのはどうしてなのだろう。他の部屋の出来事なんてところどころしか覚えていないのに。

「いえ、私はボーイでもなんでもありません。セールスマンです。夢というのがいかがわしい商品であるかもしれませんが、私は究極の商品である夢を売っているんですよ、ほらよくセールスは夢を売ることだと新人教育で言うじゃないですか。多くのビジネス書もそう言ってますよね」

「ああ、それなら……どうせそんなことだろうと思ったよ」判で押したように彼は落胆の表情を浮かべて両手を広げた。飛び込み訪問はほとんどの場合、誰も歓迎しないのだ。ただ、今回はそういうつもりはまったくなかったので自信を持って私は彼の言葉を遮る。

「いえいえ、警戒は無用です」私はにやりと笑った。おそらく顔つきは自信満々のいやらしさに満ちていただろう。「私は商売に来たのではありませんよ。あなたとお話ししたいから来たのですよ」

「まさか、政治的にどうこう言うんじゃないだろうね。何処かの国のスパイとか警察とか。わたしや、一切関わりたくないことに決めているんでね。日本の情報も何も持っていないよ。私は誰とも関わりたくないし、取引もしたくないんでね」いかにも面倒そうだと言わんばかりに。

「もちろん、何もありませんよ。あなたとお話ししなくなっただけです」

私は自身が制御できなくなっていた。私は英語をしゃべり始めた。やはり流暢な発音だったが内容がまるでわからなかった。自分で考えてる訳でもないのに私は英語を話している。しかもジェイコブは笑顔を浮かべながら相槌を打っている。私は彼とコミュニケーションできたようだ……いや、これでも今までの経緯を考えればさほど不思議な事ともいえないだろう。このホテルではどんなことだって不可能ということではなく超常現象と考えることさえ起きていたようだ。確か死者も既に何人も出ているのだから。ただ、私はすっかり忘却していると言ってもいいだろう。だが、ところどころは夢の欠片のように憶えている。それは切れ切れの、コラーージュのような、芸術作品の断片のような、前衛映画のフィルムのような、印象の曖昧な記憶の集積だった。復元

は容易ではない。そもそもこの世界が秩序立っていることが不可思議というものだ。そうして私は自分の制御可能な時を待った。何かができるようになるまで待つということはある。腰が痛くなつて動けるようになるまで待つなどの場合がそうだ。今は逆に何かができなくなるまで待つ。というのは多少は奇妙なことかもしれない。抑揚のある聞いたことのない自分の声がジェイコブの少し甲高いけど格調のある発音と交錯しているのだった。英語はナチュラルハイの状態になると考えることなく話すことは可能ではあった。ただ、自分の話していることが理解できないとは呆れた現象だ。ジェイコブの表情は俄かに緩み始めた。それで私もまた、なんとはなしに困難な試みに成功したような安堵感に包まれた。自分の表情もつられて緩んできたのをはつきりと感じた。いったい何の話をしているのだろう。私は拙いながらも必死で彼と私？との会話の内容を探ろうとしていた。耳を澄ませばいいのである。そこには正統的な英語が横たわっているだけだったから。

ジェイコブの顔はくしゃくしゃになり、涙がとめどなく流れ、滴り落ちていた。床は濡れているほどであった。彼は、振り返る。部屋の内には扉があった。雑多な書物の回廊には埃と蜘蛛の巣がいくつもあった。蜂の死骸も。彼は数冊の書物を手に取った。そして私に手渡してきた。私は、内心は戸惑っていたのだが、手さばきよく書物のページを繰って、老人に読み聞かせるように文字を追って朗読していた。情けない

ことではあったが、それでもなお私には意味が霞のようにつかめなかった。そして泥が耳に栓を込めているかのようにほとんど何も聞こえてこない。私の口唇のみがせわしなく動いてやまなかった。やはり今までの経緯からすればこれぐらいのことではさほどは驚かず、世の中で起きる現象のほとんどはおそらく不思議でもなんでもないだろう。

たとえばバイリンガルは二国の言語を操るが、言葉によって表現される人格は同じものではないように思う。一方がコミュニケーション不足で一方が過多ならば形成される人格は別なものになることはままある。同様に後天的に外国語を習得した場合でもコミュニケーション過多から別人格が立ち上がることも何度となく見てきた現象なのだった。もしいびつな人格の立ち上がるのを拒むならば言語を後天的に習得することはできなくなってしまう。

いったい英語を話している私とジェイコブは何を親密に語り合っているのだろうか？

私が生手にしている本は教科書に出ている一八世紀の初版本のように装飾された文字で粗末な紙に印字されているものであった。独特の匂いが漂っている。

「何ですか？　これは？」私は心の中で尋ねてみた。それはそうだ、そう思っている間にも私の、別人格とジェイコブは語り合っているのだから。するとどこからともな

く声が降るように聞こえてきた。それがジェイコブの声なのかは定かではない。

「バイロンさ。君は暗記していたんだぜ。ほら、いつか暗記したことがあつただろう？
憶えていないのか、ね？」

「憶えていない」私は力なく答えた。学校の英文学の授業はロレンスとジョイスであつてそれを訳していたことはあつたが、あと原文で読んだことのあるのはサリンジャーとかO・ヘンリーとか、ああそうだ、短文ならシェイクスピアやエドモンド・ウイ
ルソンやテリー・イーグルトンとか、ああ、そうだ、そういえば留学生だつた親戚に
バイロンも読まされたことがあつたかもしれない。

「君はジェイコブに天使と戦っているのかつて尋ねたんだぜ」

「……」

これは誰が話している言葉なのだろうか？ ジェイコブだったら、ジェイコブが……
…などとは言わないだろう。まあ、でも細かいことは気にしないことにした。

「単なる気まぐれでしょう。そんなに意味はないですよ」

「キミと言う奴は本当に英語と日本語では随分と違っているんだね。そんなに性格が
変わらないのが普通だと思ふんだけど」

「あなた、誰ですか？」

「あなたとたいして変わらない存在さ、ただ内面のみが生き続けるといふ、そうそう、

天使との戦いというのがジェイコブのツボにハマったみたいだね。もうすっかりあなたに夢中さ、彼は。御年九〇歳まで生き延びた甲斐があったというものだね。ただ、それが最期の悪あがきとなることはよくあることさ。あんたが死神でないことはわかってるが、あんたの別人格が天使の皮を被っているとしたら罪な話だ。まあよくあることだけだね。気をつけなよ。面倒なことに巻き込まれないとはいえないからね」これをしゃべり続ける奴の姿は私には見ることはどうしてもできなかった。

やっぱりジェイコブが語っているのではないのだろうか？

それならばそれでもよかった。問題は次第に私が現状を受け入れつつあることだった。

次第に私は耳が慣れてきて、自分の操る流暢にして精確な英語もジェイコブが語っていることもすべてとは言わないまでもおおよその意味を汲み取るくらいは可能になっていった。

それによると、まあ、読みにくいだろうから敢えて英語では記さないが、おおよそ次のようなことであつた。

なんでもその私とは名ばかりであるその男の年齢は二十八歳！ であり、実際の私よりも十数歳も若い男であり、名前はヘンリー、溯ること数年前にイギリスを離れて世界各地を軍関係の仕事で転々としていた。学者で平和主義者である父親！ のジェ

イコブ氏は相当に気に病んでいたらしい。初めの頃はちよくちよく電話も入れていたのだが、意に反してヘンリーを罵ったことがあり次第に消息がわからなくなつて数年が過ぎたという。そのうちにジェイコブ氏もまた、大学退官後は屋敷を売り払つてどこか安全な国はないかとユーロ圏を彷徨う生活を続けてきたが、通貨の変動リスクから逃れているうちに日本と言う選択肢に突き当たつた。いや、もうヨーロッパが嫌になつた、いつそ英語の通じない国で誰にも逢わないが、意外に快適な先進国並みの生活が送れるなら極東の地でも構わないだろうと思ひ起つた。そうしてひとり息子のことはすっかり諦めていたという。

そんな話を聞かされて私はおそろおそろ洗面に顔を近づけてみた。ちらつと見たに過ぎないが、金髪と碧い眼が映つていたのは当然とはいえ、あまりいい気がしなかつた。

なんでこんなことになつてしまつたのだろうか？ 英語を必死で勉強し過ぎたせいであろうか？ いや私はそのような記憶が喪われていてなかば記憶を取り戻す旅を続けていたのではなかつたのではないか。そうそう警備員には悪いことをしたのだつた。だが、どうやら糸口として、私はかつて必死になつて、それこそ外国人にならんばかりに英語を学習していたという事実はなんとか掴み取つたのだつた。それならばこれもまた収獲であろう。

ヘンリーはいつか父親と見たバイロイトのワーグナー歌劇について語るとジエイムズは感涙にむせんで語る。

「ああ、いつかまた見たいなあ、いや今すぐ見に行こうじゃないか、今じゃなきやもう行くことはかなわないぞ、私は天使どもにすでに何太刀も浴びせられていてもうふらふらじゃ、金なら腐るほどある！もう軍関係なんて危険な商売はやめることだな、ああ、わかつている。お前は私に反発していたんだよ。ノブレスオブリッジなんてもうどうでもいいじゃないか。それも私に起因するのもかもしれないがね。」

「父さん、僕ももう四十過ぎたよ。いつまでもふらふらしてる年齢でもないと思うんだ。幸い日本に職を得て、ああ、もちろん平和な産業だよ。ずっと住めないことはない。ここも大使館に聴いたんだよ。父さんがどんなに逃れようとしても、こんな遠い日本であつても、もうすっかりばれちゃつてるわけさ」

「ああ、日本は意外とダメな選択肢だったかもしれないが、私はあからさまな贅沢は好きじゃないんだよ。見てみるよ、このボロボロのホテルは。なかなか風情があつていいじゃないか。セキュリティは大問題だけだな。しかも世界の一流ホテルに比較するとサービスの悪さは世界一だよ。日本人はチップの習慣がないからホテルマンが育たないんだ。まあまだまだ貧乏な国なんだろうな。いやあ、バイロイトはいいよ。本当に」

ああ、二十八歳じゃなかったか、私は自分の過ちを恥じていた。もはや私Ⅱ日本人としての意識は次第に薄れていた。眠りにつく寸前だ。もはや何も考えられない。穴に落ちた時、警備員を殺めた時、大渦巻に呑みこまれた時、あの時と似た感覚だ。いったいいつになったら影を失った女に辿り着けるのだろうか。

こっちにおいで。ジェイコブは私と言うかヘンリーをいざなった。洗面を横目に廊下を歩むと寝室は咲き乱れた花がありベッドがあつた。点滴台から滴り落ちるブドウ糖。ひとりの老いた女性が横たわっていた。

「母さんだよ」彼女はもうそこで何年も死の淵を彷徨っているにちがいはなかつた。

「見るんだ！」ジェイコブはヘンリーともキャサリンともつかないあらゆる方向を見つめながら言った。一瞬、凍てついた薔薇が緩むかのような錯覚が起きる。彼女は眼を開いたのだった。そうしてヘンリーは駆け寄つた。彼は母親にキスした。「僕だよ。長い間、いなくなっていてすまない」

(了)

モスリン

安部孝作

黄色の粒はどれも砕けた遺物なのだ、
大麦の粥はかきませられ、うずまき、
笑う、木皮のような皮膚の下には肉がある
老婆は、煤けたのではなく、浮き彫りになったのだ。
スープを欠けた渋色の皿に差し出してくれて、
一口を待つ。一口は、
とても呑み込める熱さではなかったけれども、
指先でも舌先でも感じることはできなかった。
味を、まだ覚えていいるだろうか？ 十年後も。

— 2004年9月の手帳、欄外

※

蜘蛛の巣がはりもなく、あちこちで切れていた。手入れを怠って、かかっていたチューリップの茎に、すでに空き家になった建物が、緑に輝いていた。ひねもす眠く、スポンジ、ヨーグルトを朝食べ、再び眠り、ソファーから起き上がるのではなく、また沈み込む。モスリンを敷いた背凭れ。純白の棘。獣の色と臭いを甦らせる。

—2013年4月23日の手帳

※ 夕方

新聞紙が床に滑り落ちていた。船が傾いたかのように。

中東のI国（あるいはJ? S? 識別不可能）で遺跡が発見されたと聞いた。それを話題にしていた彼は黄ばんでしまった。もうほとんど覚えていない。

※ 晩

なにがあつたともいえない

どこにもあつたともいえない、心のように。

生地（五千年前の古戦場で産出された、へ

タペストリーとかテクストとか、

紡ぐとか）、どのようにもたとえればよいが）

言葉みたいなごみで、覆われた

記事、写真、太陽が生み出した黒魔術――

「見よ、鋼鉄の羊たちが戦士を乗せ、迫っている！」

望遠鏡を構え、叫び、笑みを浮かべ、

白毛のヴェールを捲ろうとする、

風がさつと大鐘を鳴らし、

灰になったモスリンは埃となって消える。

刷毛から流し込まれるタールが影を

固め、浮き彫りにされる鱗の目、――

なにもうめられておらず、なにも

蔽われてはいなかった、描かれず、

ただ表面だけがあつた、

影はなく、照らされた場所もなく、

ただ夢だけがあり、君たちの夢でしかなく、

さらさら砂は流れ続け、堆い山も、

塩辛い乳の流れ込む洞もまた流れる。

セラミックの遺跡、影に寝転がる犬たちの

毛の短い首に巻かれた布が、

白いままであることはない。

それは洗いたて、石鹼の香の消えぬうち、

またよごされるのだから。

ビートを鳴らせ

あんな

「楽しいわ、とっても楽しい」夫人は言った。「美しいわ、万華鏡みたい」とも言った。興奮した夫人の真っ赤な口紅のラインが唾液で歪んだ。色とりどりの照明の光と様々な形の影が重なってできた模様があちらこちらで回転している。ボクは赤いベルベットのソファに座って熱気とアルコールで霞むフロアの様子を眺めた。人々は音楽と一緒に昇天したまま動物実験でへろへろになったネズミみたいにただ同じ動きをくり返している。

*

「私も踊りたいわ」と言って立ち上がり、見たこともないダンスを踊り出したこの女性は、ボクの遠縁の親戚であるという。中年で小太りの、でもどこか品のある雰囲気。顔を漂わせ、ヨーロッパかどこかの血が入っているような彫りの深い顔は自分には似

ても似つかなかった。今まで一度も会ったことはないし、話す言葉も変な訛りがあった。馴染めなかった。どうやらもう死んでしまった夫がここへとても来たがっていたと言いが、そんなことはボクにとつてどうでもいいことだった。ただ行き当たりばったりに目的もなく生活する人間ばかりのこの街で、一体どこに連れて行けばいいのか検討もつかずに、ただ思いつくままにその辺のダンスホールに入ったのだった。それに、本人は気づいていないだろうが、夫人の表情にはまだうつつすらと**かなし**みの断片が張りついていて、ボクは居ても立ってもいられない気分になって、少しでも夫人の気分を晴らそうとしたのかもしれない。未亡人をもてなせるほどの気の利いた振る舞いも持ち合わせていなかったし、いきなりこんな派手な場所に連れてきて気を悪くするんじゃないかと思ったが意外にも夫人は楽しんでいるようだった。泥酔して床にへばりついたまま足をバタバタと動かしていた年齢不詳の男が突然立ち上がり激しく腕を振って踊り出し、夫人の肩を抱いてくると回りながらDJの横のステージに上がった。突然照明が変わり、一心不乱に踊る二人の姿をシルバーの強烈な光が火花が散

るように二人の顔の上に飛び散った。夫人の長く細かいウェーブのかかった金髪がキラキラと舞っている。DJはそんな二人を見て興奮したのか目配せをしてレコードを片手でくるりと回しながら取り出し「とっておきの曲を二人に！」とマイクに向かってがなると、低音が心臓を上下に揺さぶるような曲をかけた。すると男は夫人を両腕で抱えるように持ち上げ肩に担いで曲に合わせて体ごと揺さぶり始めた。それを見てフロアにいた客の一人が煽るように甲高い声でフーッと叫び、それにつられて多くの客が取り憑かれたように頭を振って腕を回しながらさらに激しく踊り出した。夫人は恥ずかしそうに顔を覆っていたが、しばらくするとこちらを振り返って困った顔で笑いながら手を上げた。近くにいた十代の細くなよした若い男が「君は、これやらないのかい？」と指で丸を作ってボクの顔の前に差し出しながら不思議そうな顔で言うてきた。それが一体何のことかわからなかったので黙ったままその若者の顔を見てみると、突然若者は手のひらに小さな小さな丸い機械のようなものに乗せて口に放り込むと、手に持っていた瓶に入った透明な液体と一緒に口の中に放り、飲みこんで見

せた。「知らないのか？　こうして体の中からビートを鳴らすんだ。ひとつあげようか？」丸い機械をひとつ受け取りそっとポケットの中にしまった。よく辺りの様子を観察してみると、強烈な音圧を発しているらしい人物が踊り出すと周囲の数人が吸いこまれるように近づき、動きをコントロールできなくなってぶつかり合ってはまた離れていく、という動きをくり返していた。一人、また一人と強烈なビートに身を任せながら体の輪郭がなくなってしまったように混然一体となつて踊り続ける様子があちこちに見えた。照明はそのような光景さえもまるで風景のように煌びやかに照らし続けている。ちやりちやりと薄まったラムコークの氷を指で掻き回しながらその様子を眺めていると、夫人が真っ青な顔をしてステージから降りて走ってくるのが見えた。「あの男、急に倒れたわ」ステージでさっきまで暴れていた男はすっかり体の一部が抜け落ちてしまったようにだらりと腕を広げて横たわったまま床の上を転がっていた。骨と骨がぶつかり合う鈍い音が聞こえる。まるでやせ細った猫のように関節を曲げて前に手を伸ばししがき、そのたびに男がつけているシルバーの指輪がかちやりと

鳴った。しばらくすると少しづつバランスを崩してステージの前方に移動し、ついにはステージからずるずると落ちて動かなくなった。

*

「人づてにここのことを色々聞いて、なんとなく来てみたくなっちゃって。夫が死んでから、家も売り払って、ずっと旅に出ていたの。思いきってあなたを頼って来てみて驚いたわ。こんな街は今まで見たことがないわ」

*

緑の車が一台ボク達の前に止まって窓が開くと、口の周りいっぱいにピアスをしたスキンヘッドの男が「だめじゃないか、なんだか表情が冴えないな」と言って後部座

席から何かを引っ張り出しこちらに投げて去っていった。それは一枚のレコードだった。ボクは鞆にレコードを突っ込むと、通りを横断する千鳥足の女達や路上に座り込んで抱き合ったまま動かないゲイのカップルを避けながら夫人を連れて予約を取っておいたホテルまで早足で歩いた。極端に暗いロビーに目が慣れずに数度まばたきをしてからカウンターで名前を告げ鍵をもらうと、夫人を伴って暗く狭いレストランで遅い夕食を食べた。どこに行っても言えることだが従業員が数人しか見当たらず、その上客が四方八方から入ったり出たりをくり返すので、勘定をもらうのを忘れたり、まったく違う料理が運ばれてきてもそのまま食べてしまったりしているが、皆が一樣に満足そうな顔をしている。それは店員も同じで、どこかのテーブルについたまま酒を飲み出す店員さえいる。混沌としているようでいて、ボクにとっては見慣れた光景だった。そんな光景を目を丸くして見渡している夫人をよそに、誰かが頼んだらしいチーズの盛り合わせをつつき、冷めたオムレツを口に押し込むと、夫人に鍵を渡した。「明日また迎えに来ます」そう告げると、夫人は熱を持って紅潮した頬を動かしながら

ら「あら、いいのに、大丈夫よ」と手を振りながら上機嫌そうに残りのワインを飲み干した。ボクは口に手を持って行って夫人の耳元で「この街の人は**かなしみ**を嫌います。作り笑顔で歩いていたら、この街の人達がほっときませんよ」と呟いた。夫人は呆気にとられたようにサラダに伸ばした手を止めて「あら、平気なのに」と言つて口をナプキンで拭いた。赤い口紅はすっかり取れてしまつて乾いた血色の悪いくちびるが小さく震えていた。それから夫人は慌てたように「私、まだ**かなしい**のかしら？」と言つて覆うように両手で顔を包んでから「どうすればいいのかしら」とまるで助けを呼ぶ物乞いのような調子で言った。ボクはそんな夫人が何故か可笑しく思えてきて思わずふふつと、笑つてしまった。

*

通りには人が溢れていた。一人の腰の曲がつた老人が籠に溢れんばかりの花を詰め、あちらこちらにまき散らしながら歩いているのが見えた。花を踏みしめながら歩いて

いると黙々と新聞を燃やしている青年がこちらを見て「一緒にコーヒーを飲みませんか」と声をかけてきた。青年は折り畳式の小さい椅子をガレージから出してきて路肩に並べてからポットになみなみと入ったコーヒーを持って来た。その辺にあった段ボールをひっくり返してカップを並べ、即席のカフェを作ってくれた。「最近仕事が忙しくて、なかなかこうやってゆっくりする時間がなかったんだ」青年は束になって置かれていた新聞の山を指差しながら言った。「新聞記事の処分の仕事はかなり大変だと聞いたことがあります。最近**かなしい**ニュースが多いみたいですから。人々がこうして何も知らずにすむのもあなたのおかげですね」青年は満足そうに「とてもやりがいのある仕事だよ」と言ってから、街にあるすべての新聞社やラジオ局にもっと厳しく情報を制限するよう求める運動をしている、という話を一時間以上も話して聞かせてくれた。熱心に語った後で青年は溜息をひとつついて「いつかはこの街も変わってしまうだろうな」とか細く小さな声で言ってから隠れるように家の中に戻ってしまった。

*

アパートに帰宅し、鞆を放り投げてベッドに横になってから、鞆からはみ出ているレコードの存在を思い出し、祖父から譲り受けた古いレコードプレーヤーに乗せてみることにした。レコードの表面を念入りに拭きセットしてから針をゆつくりと落とすと数秒後にプツプツとノイズ音が流れ、小さく破裂音が鳴った後、ぷつぷつと音が切れレコードが止まってしまった。よく見てみると針が折れてしまったようだった。

*

死んでいるのかいないのかよくわからない人々の間をむせかえるような花と煙の匂いが漂い、頭をぼうつとさせた。窓を開けて大音量でオペラを流している車が信号

が止まった通りを往復し、壮大な音楽が耳の奥で近づいたり遠ざかったりしている朝だった。ホテルのロビーで待つ夫人の元へ駆け寄ると見知らぬ男と楽しそうに話していた。「この方、昨日ここに来て今から面白いパーティーに参加するんですって。一緒に行ってみない？」男は中性的な顔をした痩せた男で、ボクに挨拶すると足早に外に出て止めてあった車のドアを開けると、ガラス越しに手を挙げてボク達を呼んだ。ボクと夫人は吸いこまれるように乗車し、男はドアが閉まるとスピーカーの音量を上げて猛スピードで走り出した。男の雑な運転にシートベルトで固定されているはずの夫人のずっしりとした腰がシートの上で不安定に浮き上がったり沈んだりしている。「ジェットコースターに乗ったのかしら」と微笑む夫人をミラー越しに男が見てにやりと笑った。どこに向かっているかもわからないまま、車の揺れと車内に流れている奇妙なリズムの音楽のせいで変な高揚感に包まれていると、男が突然「見ろよ、あれ」と言つて先にある大通りを指差した。遠くに見える色とりどりのビニールボールが一斉に転がってくるような様子のそれは、よく見ると無数の人の大群だった。やけに派

手な格好をした何千、もしくは何万の人々が隊列を組んでこちらに歩いてくる。「昨日ホテルのバーで会った人に聞いたんだけど、あまりにこの街に人が来るものだから住民がデモをしてるって」男が上擦った声で言うと、夫人が「まあ、すごい数！」と窓に顔をつけて子供のようににはしゃいでいる。あつという間に群衆は近づいてきてドラムやラッパ、ギター、笛、様々な楽器を使って凄まじい音量で波のような音の洪水を辺り一面に放出していた。通りを挟んで両側に車が何台も立ち往生してしまい、車外に出てデモに参加したりパーティーと勘違いして騒ぎ出す者もいた。シュプレヒコールが地鳴りのように街全体を震わせて、人々の熱気を誰も手の届かないような所まで押し上げていく。

かなしみを！

うけいれるな！

かなしみを！

ゆるさない！

涙を流す人物の上に赤い大きなバツが描かれた紙やプラカードを左右に振りながら練り歩く人々の数は増え続け、通りいっぱいになり収まらない程に膨れあがった。しばらくして男が「これは渡れそうもないな」と少し苛立った様子でハンドルを軽く両手で弾いた。「終わるまで待つしかなさそうですね」ボクは窓の外を行き交う人の動きに目が回りそうになりながらミラーを覗きこんで言ったが男の顔は見えなかった。数秒だったか数分だったか、それとも数時間だったか、ボク達は無言でただじっとしていた。急に男がスピーカーの音楽を切ったかと思うと、何かを決心したかのようにアクセルを踏み込んだ。車はエンジン音を上げながら人の群れぎりぎりまで進むと、すべての音をかき消す程の大きな音のクラクションを鳴らしながら、そのまま人の群れに突進していった。男を止めようと身を乗り出したその瞬間、突然時間が止まったように周囲の音が一切消失し、無音のまま景色が静止した。ボクは蠢く人々の顔が皆一

様に無表情であることに気づいて血の気が引いていくほどの恐怖を感じた。咄嗟に目を瞑ってじっとしていると、これは夢かもしれないと思えてきた。強く眩しい光の中に体ごと突っ込むような感覚を覚えまぶたを開けると、辺りは真っ白だった。

「ぼくはかなしい」

ぼくは大きな声で言ってみた。すると言葉は空中を舞って運転席にいる男の口の中に入った。男は突然泣き出し、「こんなのもうたくさんだ！」と言ってハンドルを握りながら、

「かなしくてたまらない！」と叫び、さらに大きなクラクションを何度も何度も鳴らして人の群れの中に突進していった。夫人は固まったまま体を硬直させてただシートにしがみついているだけだった。プラカードを持った一人の女がシユプレヒコールを叫びながら車の方へにじり寄って来るのが見えた。

かなしみをうけいれるな！

かなしみをうけいれるな！

「お願いだ、近寄って来るな」男は避けるように左へハンドルを切った。するとフロントガラスに触れるほどの近距離で、

かなしみをゆるさない

と書かれたプラカードが現れた。男は「ちくしょう！」と思い切りアクセルを踏み込んで一気に右へとハンドルを回した。するとすぐ先に現れたのは、人でもプラカードでもなく、コンクリートの柱だった。男は両手を挙げて「惨敗だ！」と言ってミラー越しにちらりとこちらを見た。男の表情は無表情だった。車は一直線に柱に向かって進み、太く堅い灰色の塊がすぐそこに立っているのが見えた。体の表面の空気が一瞬にして重くなり、人形のように四肢を投げ出したまま脱力して一瞬宙に浮いてから、

体が隅々まで痺れるのを感じた。想像を絶するほどの力を加えられた衝撃が体の芯まで達した時、くすんだ灰色の、何もない景色だけがぼんやりと広がった。金属が焼けるような匂いがして、ずっと遠くにひとつだけ小さな光が揺れているのをじっと見つけた。ゆっくりと意識が剥がされていくような感覚を覚えた時、ふと痺れる手を動かしてポケットに手を入れた。あの丸い機械を震える手のひらに乗せて、口に入れて唾液と一緒に飲み込んだ。ボクの心臓はゆっくりとビートを刻み始めた。

自由

電池は心許なくなっている。彼女は夫への返信を終えて顔を上げる。夜が近い。窓に白い虫の卵のような車内の灯りがうつり、その下には彼女自身の疲れた顔が浮かんでいる。電車は海から遠く離れた。さつきまでは海と隣り合い、あつい雲の奥からはまだ太陽の光が見えた。破れて噴き出した動脈血のような色にめめられていた海はスマートフォンをいじっているうちに消え、あたりの生き物は深く、濃い静けさのうちに潜りこむ。そばを通った民家のベランダにくすんだシャツが一枚かかっている。彼女はそれを自分の顔の奥に見つける。昨日も一昨日もシャツはそこにあり、暗がりでも風になびいていた。彼女は首のうしろを強くおさえて長い息を吐いた。気がかりなことがいくつもあった。それが首のうしろのしこりになつてたまっているような気がしていた。

柵をこえるとたちまち動物になつてしまふ奇病が流行つた村にいて、村人たちの半分以上は、一週間のうちに柵をこえてしまった。びよんびよんと軽快な動きで、びよんびよんびよんびよんびよんとこえてしまふ。最初はかれらの判断をそしつた者も、次の日には柵の内側でのんびりとした声をあげている。柵の外側において動物化した友

人や恋人への未練を断ち切ることでできないわずかな者たちは斧をふりかぶり柵を壊したが、動物たちは出ようとしなかった。翌朝に村人が柵の前にやってくると、誰かの手によって柵が直されており、かれらの愁いはいつそう深くなった。

電車は無人駅から無人駅へ走っていく。暗い駅に着くと数人が降り、数人が乗りこんだ。一時間に一本きりの電車は混んでおり、みな黙っている。三つ先の大きな駅までは混雑が続く。彼女はボックス席に座っている。隣の窓側には背広の男、向かいには制服の違う女子高校生が二人ならんでおり、三人とも使い慣れた顔で沈黙している。電車が暗い駅に停まると真向かいの高校生が降り、席がひとつ空いた。彼女は高校生の座っていた部分がわずかにくぼんで皺が寄っているのを何も考えずに見ていたが、両手に握りしめていたスマートフォンが汗で濡れているのに気がつく、それをバッグにしまい、かわりに読みかけていた文庫本を取り出した。電車が背骨の折れているをごまかすような音を立ててゆっくりと動き始める。

狩猟民族としてかつては勇敢に戦った民族も、柵を作り、食糧となる獣を育てることに旨味をおぼえてしまった今では、もう一度戦闘のための長い槍をこしらえる力はなかった。九十をこえた老婆が下履きをひらひらと風に舞わせながら軽い跳躍を見せ、毛むくじやらの羊に姿を変えて降り立つのを見ていた村人の一人は、羊の肉を食い羊の毛を刈ることは老婆の皮を剥ぐことだと言った。一人はそれに反対して動物になっ

てしまったからにはもはや理性はなく、人間的に扱う必要はないのだと力説した。お前は目の前にいる獣が母親だったとしても黙って見過ごせるのかという反駁を聞き、もうおれはどの獣が母親だったのかも分からないだと涙を流す者がいた。

「ここ、いいかしら。ごめんなさいね」女の声がした。早口の低い声だった。ボックス席に居座った二人が答えずにいると、彼女の視界の上端に女の生脚が入ってきた。「隣、座らせてもらうからね。ごめんね。ごめんね」「はい」窓際の女子高校生の声。

電車は長いトンネルに入った。彼女はずっと同じページを読んでいた。次のページをめくるのだが、すぐに前のページの何行かを理解し損ねたような気がして戻るのであった。彼女は片手を離し、また首のうしろをもみこんだ。文字がすべっていくのを彼女は感じていた。視界の端に女の脚がのぞき続けている。すっかり盛りを過ぎた雨蛙の体色のようなかすれた緑色が見える。顎を引き目を落とすと女の履いているサンダルの色だった。ブランドは分からない。太くて短い十の足指がこちらを向いてびったりそろえられている。彼女の目はもう文章には戻っていかない。女の脚を見ずにいられない。白地のワンピースの下は地肌だ。肌は太陽の熱をこびりつけた樹肌のような暗い色をしている。すねには黒く剛い毛が下を向いてまばらに生えており、足指の先には熟れきった南国の果物を思わせる色のマニキュアが雑に塗りつけられている。それらがサンダルの緑色とあいまってにおい立つてくるような雰囲気をそなえていた。女

がサンダルの親指をつんと上に向ける。女の親指は人差し指の上に乗っかり、人差し指をぐいぐいと押すようにしていたかと思うと、ひゅつと元の場所に引っこんだ。女は反対の脚でも同じことをやった。彼女は自分のストッキングに包まれた脚を引っこめ、深く座り直した。トンネルを抜けると一面が畑になった。灯はなく、森の際がまだほの白かった。

対立は深まり、その間にも柵の外側には飢餓が起こった。一人の村人が食糧を求めて外に出て行き、翌々晩に片脚を失い這うように戻って来ると、それを見た者たちは自分たちの去勢された姿を目の当たりにするような思いがした。その姿が村人たちの不安を煽ることをおそれた村長によって、片脚の男は村外れの廃屋に四肢をつながれた。腹を減らした誰かの眠りに男の歯ざしりとうめき声がしのびこんで夢を食い荒らすと次の日にはまた柵が壊された。その次の日にはまた柵が直されたが、今度は前よりもずさんな仕事で、誰かが押すとすぐにでも崩れそうな代物だった。

ビニール袋から何かを取り出す音がしていた。女が「ああら」と大きな声をあげた。隣の男の動いた気配があり、彼女が少し顔をあげると、背広の男が鼻から息を吹き出しながら女に何かを渡したところだった。彼女がもう少し顔をあげると女の手に握られていたのは輪ゴムだった。「ごめんなさいね、あなた」「いえ」男はまた鼻から息を吹き出した。「わたしったら、やあね」酢のにおいが漂っている。木の割れる小気味

ものではない。柵の内側には羊や牛その他の畜生がひしめいており、それらがめいめいの方向へ頭を動かして草を食もうとしているが、あちこちでのろまな胴体をぶつけてしまい小競り合いになっている。それを見る村人たちは顔を覆い、旅人に分からぬ言葉をつぶやいている。旅人は放棄された宿に一泊すると、呪われた村の復興を祈り多めの代価を帳場に置いて去り、後年村の行方を調べたが、知る者は誰もなく、風の便りもなかった。

暗い駅に着き、数名が降りていった。彼女はボックス席の人間と目を合わせないように窓の奥を見る。電車がゆっくり動き出すと駅前の白熱灯の下を暗いかげを牽いて歩いてゆく人のすがたが点々と見える。彼女はまた視線を文庫本を握っている膝の上にもどした。「あら、あなた、多岐川裕美に似てるわね」彼女は黙っていた。「あなたよ」あなたというのが誰を指すのか分からずに彼女はまだしばらく本に目を落としていたが、後に続く熱を帯びた沈黙が自分とつながっているようにしか思われず、とうとう顔をあげた。女は目の前にいて唇をもちあげ笑っている。「やつぱり。ちゃんと見てもそうね。あなた、多岐川裕美に似てるって言われたい？」「はあ」女は弁当を膝の上に置き、割り箸で御飯をつまみあげる。上に錦糸卵とイクラが乗っていて、今にもこぼれそうにふるえながら、しゃべり始めた女の口に運ばれていくのを待っている。女はじつと彼女を見ていた。彼女は目をそらした。「目がおつきくって、きりっ

として。肌も白いし。いいわねえ」女は彼女に顔を近づけた。二人の目が合った。女の目は大きく、鼻に寄っていて、眼光がするどく瞳が動かない。「いや、ぜんぜん、違うと思いますよ。そんな、とんでもないです」「いやあ、ほんとに似てるわよ。うんうん、わたし、そうだと思う」「うんうん、と言いながらも女はうなずかず、粉をはいた顔をまっすぐ彼女の方に固定したままである。彼女はそれを強い圧迫のように感じて次の言葉が出せない。女はなおも言う。「わたし、多岐川裕美、好きなのよ。だから裕美さんに似ている人に会えてうれしい」錦糸卵とイクラが女の口の中へ運ばれていく。女は口元に手を持っていき、隠すようにしながら慎重に食べる。今さら、と彼女は思った。赤く塗られたぶあつい唇が指と指の間からのぞく。その唇の合わせ目がよどんだ沼に立つ波のようにくねる。魚卵が上の歯と下の歯に挟まれて、中身が口一杯にあふれ出しているのを彼女は想像する。どうしてこの人はよりによってちらし寿司を食べながら話しかけてくるのか。背広の男が窓を向いて自分を見つめようとしている気がした。この人は多岐川裕美を知っているのだらうと思い、彼女は顔が熱くなってくるのを感じた。彼女もまた子どもの頃にテレビでよく見た女優の強いまなざしや、こころもち傾けられた頭、意味ありげに伏せられた目を思い出す。錦糸卵がこぼれて女の胸元に乗った。女は「ふふふ」と言いながら拾い上げ、笑顔で食べる。女の胸には青い花が大きくプリントされている。ワンピースの白地に、空中を落下す

る青い花が今にも花粉を吐き出しそうな鮮やかさでいくつも咲いている。手持ちの小さな鞆もワンピースの地と同じ色で、こちらには柄はなかった。背広の男がふう、と息を吐いた。彼女は男の体内を通り抜けてあふれた空気や、寿司を食べる女の鼻から漏れた空気を吸いこんでいる自分を意識し、喉の奥に唾がたまっているのを感じた。モウアラソイハヤメヨウ、一頭がしゃべり始めたのを契機に、言葉が伝染するように柵を駆け巡っていった。ミンナデナカヨククサヲタバエウジャナイカ、ココヲタバタイ、アソコモタバタイトミンナガイツテイタラ、ミンナニモタバラレナイ。三メートルの体躯とねじれて絡まり上でつながつた角をもつ羚羊が仕切って自治組織を作った。牧草地を等分し、水場への道を公道として、ブロックごとに計画的な食事を行うように決めたことよって、動物たちは互いの体をぶつけることなく草を食べられるようになり、少しの間はおとなしくなった。

次の駅に着いた頃、もう食べ終えていた女はまた彼女に声をかけた。彼女は、今度は自分に話しかけられているのがすぐに分かった。「鳥取は風が強いかしら」彼女は周囲の意識がこちらに向けられているのを感じながら、わずかに微笑んでうなずく。「鳥取は風が強いのかしらねえ」と女はもう一度言った。「どうでしょうか、分かりません」「そうお？　でも瀬戸内海とは違うわよねえ。やっぱり日本海っていうくらいだから、吹くわよねえ」彼女はまたあいまいにうなずいた。風？　この女はこれか

ら鳥取に行こうとしているのだろうか、この時間に鈍行で？ 鳥取は東西に長く、これから鳥取に行くとしてまだ三時間はかかり、ずいぶん遅くなるはずだった。「はあ」と女がため息をついた。「ねえ」と言うので前を向くと、女は窓を向いていた。「わたしって芸能人だと誰に似てると思う？」「えっ」女は芝居がかったしぐさで前に向き直る。「わたしって誰に似てるのかしら」彼女は黙り、女の顔かたちを観察した。眉が太く、頬はこけている。目は大きく、まばたきをした後で眼球がぎゅっと飛び出る癖がある。髪は傷んで縮れ、浜に打ち上げられて何日も過ごした海藻を思わせる。誰に似てる？ 彼女は疲れがかぶさってくるのを感じていた。疲れて電車に乗って、どうして突然この見ず知らずのおばさんが誰に似てるかを考えなきゃいけないのか。窓の奥がいつそう暗くなっていく。「ねえ、わたしの肌って浅黒いでしょ。しかも目が飛び出してるでしょう。髪だってぼさぼさだし、汚いでしょ」「いえ、そんなこと。おきれいですよ」「お世辞はいいのよ、だってわたしはもうおそろしくおばさんなんだから。あなたみたいに若い頃からわたしはこんなおばさんだったのよ」「はあ」「お医者様に言われたのよ。あなたの肌が黒いのは男性に近いからでしょうって」女は続ける。「でもわたし前田敦子ちゃんに似てるってよく言われるのよ」何を言っているんだ、と思いつつも一度見ると、確かにそのアイドルに近い特徴をもっているように見えなくもない。「ああ、そうかもしれないね」精一杯のやさしい声を

くりながら彼女が言う、「そうでしょう、やっぱり。でもこんな肌が黒いおばさんが前田敦子ちゃんに似てるなんて、おこがましいわよねえ。ねえ、あなたは思う？ わたし肌黒いわよねえ」彼女はもう答えなかった。手元の文庫本に目をもどした。重たいものを通りすがりにぶつけられたような気分だった。黙りこんだ彼女の上に、女の声が降る。「ごめんなさいね、話につきあわせちゃって。いいのよ、つきあわなくて」女はふふつ、と笑った。女のサンダルの親指がまた動いていた。彼女は本のページをわざとめくり、女を断ち切ろうとしたが、親指の動きが頭から離れようとしなかった。そうだ、いやなら席をかえてしまえばいい。女は見る限り今日だけの乗客だろう。無言で去ってしまった後も後に何かが残るわけじゃない。そう考えながらも、彼女はボックス席を離れない。

問題は言葉だった。獲得してしまった言葉は区画に分けられた動物たちにはまったく不要なものだった。食べるための草はそこにあり、誰かと衝突する危険も回避されたのだから。動物たちは人間だった頃の記憶をもっていなかったが、持て余した言葉によってすぐに冷たい争いの空気が生まれ、指導者であった絡まり角の羚羊に対する不信・不満も地下を這う茎のように拡がって、柵内のどこに破綻の果実が実り出してきたもおかしくはない状態になった。そのうちにも新しい動物が柵の外からやってきて、羚羊は新たな区画整理に追われた。村人はすでに柵を作り直すことをやめ、入っ

ていくに任せている。

女はまた「あなた、それにしても似てるわね」と言い、ビニール袋からペットボトルの水を取り出して、しゃくするように飲んだ。それからまたしゃべりながら、窓の外に目をやり、ふう、ふうと息を立てて水を飲んだ。彼女は女の動きにあわせて周囲の人間の動きを観察した。背広の男は手で頬から下を覆っていた。彼女には男がどんなことを考えているか分かるような気がした。話しかけられているのが自分でなければ、自分も同じようにどうにかして顔を隠したくなっているだろうと思われた。女子高生は鞆に顔をうずめたまま、スマートフォンを取り出して熱心に指を動かしている。それも分かる気がした。女は、ふふつ、と笑って水を飲んだ。女は気がつかないんだらう。

虐殺は一瞬だった。地に足のつかない若者たちがやってきて動物へ次々に斧を振り下ろしたのだった。若者はそれまで何も知らされず丘の上の寮に隔離されていたのだが、主に食事の量が減り続けることから来る疑念と向こう見ずの熱情が沸点をこえた数人がついに錠を破った。若者はたちまち村になだれこみ、惨状を知った。かれらはすぐに行動を起こした。餓死してあちこちに転がった大人たちの骸をまたぎこすと、柵にもたれた無力な人間をなぎ倒し、動物たちへ向かったのだ。かれらの足はいずれもわずかに宙に浮き、かれらの眼球はいずれも血で真っ赤にまっていた。かれらは

暴れる獲物を集団でおさえつけ、胴にまっすぐ斧をつきたてて、嘔き出た血を嘗めるようにして飲んだ。絡まり角の羚羊はしきりに叫んでいたが、言葉は誰にも伝わらず、喉元をすっぱり切られてあっさり絶命した。角はもぎとられてかれらの暴力の象徴となった。動物たちは柵から逃げようとはせず、元が草食であるためにほとんど抵抗もできず、あつという間に柵の内側は壊滅してしまった。数百の動物を虐殺してもなお若者は血走りをおさえられず、仕事終わりに何倍かの麦酒をひっかけると、村の外へ濁流のように去っていき、二度と戻らなかつた。

電車は橋を渡り始めた。数日前の雨で増えた水が海に注いでいるが、すでに暗く、色も流れも乗客には見えぬ。温泉地と断崖が近づいている。「これあげます」女の手がにゅつと突き出された。黒い飴の包みが女の手のひらにある。「あ、はい、いえ」彼女は下を向いたまま手を振って断ろうとしたが、「なあに、お礼よ。つきあつてくれたお礼」女は引っこめようとしなない。彼女は顔をあげる。女の小さな白い鞆の中から、袋から出された黒い飴がいくつも詰めこまれているのぞいていく。「おばちゃんでしょう。ふふふ」「ありがとうございます」彼女は受け取るときに女のがさついた手に触れ、女に触れている自分を強く意識した。女はまた水を飲む。「あなたはどこに行くの」と言った。嘘を言うか、ごまかしてもいいだろうと彼女は思ったが、彼女が頭の中で答えを考える前に、女は鼻の奥に言葉をためる、わざとら

しい口調で言った。「鳥取はまだ遠いかしらね」彼女は疲れきっている自分を感じたが、小さく「鳥取ですか」と応えた。「そう。鳥取には泊まるところがあるかしら」「いえ、鳥取は、まだまだ時間がかかります。この電車で着くでしょうか。着くとしても鳥取まであと二時間、三時間？」「えっ」女の声は大きくなった。「そうなの。困ったわあ。鳥取方面に乗ったんだけど」「今、島根県を出たあたりなんですけど、鳥取は県の東部なので、今わたしたちが乗っている各停だと、たぶん鳥取までは行きませんよ」「あらあ、どうしたらいいかしら」「泊まる場所を鳥取に予約しておられますか」「そういうの、何もしてないのよ」「鳥取にお知り合いは」「いいえ、誰もいません」それは変だろう。何をしに鳥取へ？ 女は鼻の上に皺を寄せ目に見えて困った顔をしている。今度はわざとらしいとは思われなかった。女子高校生が指を止め、会話を聞いているのが分かる。彼女は鳥取までいくつの駅が残っているかを考えた。唾がたまるように次から次へ疑問が湧き出した。女はなぜ鈍行にいるのか。なぜ鳥取へ行きながっているのか。泊まるところを決めていないのはなぜか。そのとき彼女の頭にある予感が浮かんだが、女がまだ困った顔をしているのを見て、それをなんとか脇に押しやり、とりあえず現実的な解決策を提示してやるべきだろうと思った。電車は橋を抜けていた。軋み音を立てながら、市街地へ続く暗いカーブを走っていく。併走する自動車は後ろに消えていった。「そうですね。今の時間なら米子で泊まるところを探さ

れるのがいいと思います。米子ならもうすぐ着きますし、駅の近くに泊まるところもたくさんあります。米子からなら、鳥取行きも出ていますよ」「そう」「ただ米子を過ぎてしまうと」背広の男の顔が窓にうつっている。これ以上話したくはなかったが女に見られているので彼女は続けざるを得なかった。「もう本当に、鳥取までほとんど大きな駅がないです。夜遅くに鳥取に着いて、それから探すのは難しいかもしれませんが」「あら、そうなの」「それか、特急券を買って、乗り換えると早いです、けど、だいぶ時間が遅いですから、この時間に出てるか分かりません」彼女はスマートフォンが切れかかっているのを思い出していた。女は少しの間黙っていたが、「あらあ、それじゃあ、米子で降りてみようかしら」とつぶやいた。「そうですか、気をつけてくださいね」彼女は女の持ち物をあらためて見やりながら言った。女は小さな鞆以外には何も持っていなかった。どこかに泊まるための道具も、翌日の衣類も。「あらがとう、あなた、やさしいわね」と女は言った。

何かが起こった現場を片づけるのはいつも残された者だ。大虐殺の後、村人がおそるおそる柵の内側に足を踏み入れても、もはや誰も動物には変わらなかった。器用に仕事を遂行するための二本の腕が、黙々と家族や友人や恋人の肉を拾い上げていった。血にそめられた肉の区別など村人にはつきようもなく、村長が拾ったものはすべて拾った者の所有物としてよいことにすると、その晩はどの家の煙突からも煙があがった。

村人はよだれを垂らして肉を食い、酒を飲んだが、次の朝には全員、荷物をまとめて村から消えてしまった。まだしばらくは村外れの小屋からうめき声が聞こえてきたが、それもそのうち、消えてしまった。

田園から住宅地へと景色がうつりかわり、灯りが増えていく。すぐに米子駅の薄明るい建物に電車はすべりこんだ。向かいのホームには島根方面の列車に乗ろうとする男女がまばらに立っている。車内の空気がにわかには動き出し、多くの乗客が扉に近づこうとする。女子高校生はまだ電車が停止しないうちから立った。赤ん坊を抱き上げるように鞆を持ち、目はスマートフォンからはずさなかつた。女の脚と彼女の脚の間を通るとき、少し考えるようにして、横向きに通った。どちらにもぶつからなかつた。「あなた、ありがとう」女は電車が停まって立ち上がるとき、また彼女に礼を述べた。「いえ、お気をつけて」寿司の入っていたビニール袋が鞆のふちからはみ出しているのが見える。女は背が高かつた。ワンピースからはみ出した脚が長く、細く見えたのは彼女には意外だつた。女は降りていく乗客にまざつてふらふらと出て行つた。ホームに立ち、しばらくの間、右左を確認するように頭だけ動かしていたが、そのうちに他の人間と同じ方向へ進み出した。そのとき女がふつと後ろを向き、こちらを見るような気がしたので、彼女は目をそらした。少ししてもう一度見ると女はいない。電車が動いた。米子を出るとずっと無人駅が続く。乗客はあつという間に減り、あたりは

暗くなっていくばかりだった。米子から二つ目の駅で背広の男が降りた。ホームに出たときに彼女を振り返って、彼女のすがたを確かめようとしているのが分かった。やはりこの男は女優の顔を思い浮かべながら話を聞いていたんだろうと彼女は思い、また顔が熱くなってくるのを感じた。彼女はボックス席に一人だった。電車は日本海をのぞむ巨大な墓地群のそばを通っていく。スマートフォンを取り出し、女優の顔を調べる。「似てねえよ、どう見ても」そうつぶやくとスマートフォンの電池が切れた。彼女は黒い飴の包みを手の中で転がしながら、電車の走る音を聞いていた。

(了)

映画『アレクサンドリア』読解

あき

(本作は作品の結末にふれております。ネタバレがあるのでご注意ください。)

サミュエル・ハンチントンが提唱した「文明の衝突」という概念があります。曰く、アメリカとソ連による冷戦が終わった後に、訪れるものは「文明同士の衝突」である、と。2001年9月11日のアメリカ同時多発テロ事件は、まさにハンチントンの提唱した「文明の衝突」として人々の眼には映ったのです。その状況に対して、反論したのがエドワード・サイードでした。彼はその状況を「文明の衝突」ではなく「無知の衝突」だと批判しました。サイードの批判は、文明それぞれが抱える多元性をハンチントンが見落としていることを指摘するものでもありました。

本作『アレクサンドリア』は、ヒュパティアの半生を描くだけでなく、キリスト教とユダヤ教の対立が主軸として描かれています。ユダヤ教をイスラム教などに置き換えれば、今日的意義を備えていることは容易に予想できます。ゆえに、本作も『文明の衝突』の文脈で語られそうですが、果たして、本作で描かれているのは、『文明の衝突』として片付けられるのでしょうか。本稿の意義は、ヒュパティアに投影さ

れているものが何か検討し、本作が何を描こうとしていたかについて検証することにあります。そのためには、まずヒュパティアが作中で発見したものについて、着目する必要があると思います。

ヒュパティアは、本作においては最も知性的な存在であり優れた哲学者です。それがゆえに作中ではヒュパティアは、地球が太陽の周囲を回るといふ地動説における、楕円軌道を発見します。楕円軌道の軸となる点は1つではなく、2つ。ここには「唯一絶対的な神が世界を支配するという一神教的な考え方」を退ける、多元主義的な観点が芽生えています。鑑賞者はそれに気付くと同時に、ヒュパティアがこの楕円軌道を発見した際、彼女や砂場を見下ろすショットにおいて、楕円軌道の中心の2つの点のうち、1つの炎が消され、片方のみが燃えていることにも留意する必要があります。ここにユダヤ教の衰退が暗示されているわけです。

なぜ、ヒュパティアだけが楕円軌道を発見できたのか、それは、優秀な学者であり教育者でもあるヒュパティアが表象しているものが「理性」そのものだからです。対し、争いを望む男たちの姿は「野蛮」そのものです。ヒュパティアが教師をしている間は、世界の秩序も保たれています。彼女の影響力は時間の進行と共に衰えることになりす。決定的なのは、図書館破壊のシーン。これは「理性・知性」の象徴とし

ての図書館が「野蛮」な暴力によって破壊されてしまうシーンなのですが、このシーンにおいては「理性と野蛮のヒエラルキーの転倒」が暗示された、天地の逆転するシヨットがあります。

また、この図書館破壊を境目にして、ヒュパティアと、彼女に対して恋慕を抱く奴隷ダオスの関係も変化します。ダオスは序盤、ヒュパティアの奴隷でありながら、彼女の優秀な哲学の弟子の1人でもありますが、図書館破壊を機に、ヒュパティアの元を去ることを決意します。図書館破壊直後、ダオスは一時的にヒュパティアのところへ戻ってきて、主人であるヒュパティアより奴隷であることから解放されますが、解放の直前、ヒュパティアに対して欲情して彼女を抑え付ける彼の姿は、解放どころか支配的にすら見えます。この瞬間において、かつての主従関係は逆転しています。そして、このシーンは結末で再現されることとなります。

作品の結末に触れましょう。本作の最後はヒュパティアの死によって締めくくられます。それもヒュパティア自身が主人であった、かつての奴隷であるダオスによって、ヒュパティアは口を塞がれ、窒息して意識を失い、そして死に至ります。ヒュパティアの死は本来、もつと凄惨なものでした。ヒュパティアは、「家の屋根に用いていた、カキの貝殻で生きたまま肉を削ぎ落されて」殺害されたのです。ゆえに本作には「ヒ

ユパティアの死を綺麗に描き過ぎているのではないか」という批判もあります。

しかし、ここは一度立ち止まって考えてみる必要があります。「ヒュパティア殺害の方法を変えたのは何故か」。本来の死が残酷だったために、それを再現してしまおうと鑑賞者にとって心理的な負担がかかるため、などという理由だけでは無いでしょう。この疑問について検討するためには、本作のジェンダーの扱い、つまり男性と女性の描き分け、そして「声」について注目する必要があります。

映画開始から28分、キリスト教徒とユダヤ教徒が殺陣を繰り広げる直前に以下のような台詞があります。キリスト教徒が一体の像に向かって耳を澄ますシーンです。字幕においては「この”神”とやらの声を聞こう」と翻訳されている台詞、原語では「Let's listen to her now」。この「神」は「her」、つまり女性性であり、その直後、台詞は「これも声を失った」と続きます。また1時間29分の箇所では「女は静かに従順に学ぶべきだ、女が教えたり男の上に立つのは許さない、女は静かにしているべきだ」という台詞もあります。

「声」（あるいは「顔」や「名前」とは「個人としての権利や生命」を表象する概念です。例えば、社会的に追放された人々は、発言権などの基本的な人権を失います。「死人に口なし」という慣用句がありますが、死者もまた自らの「声」を発すること

ができません。ここで検討すべきは、本作『アレクサンドリア』の登場人物で具体的な台詞を持つ女性の登場人物は何人存在したかということです。結論を述べてしまおうと、「独立した名前のある個人として台詞を持つ女性」はヒュパティアだけです。

本当に、女性の登場人物は他にいなかったか。確かに、序盤、ヒュパティアの父親に「十字架は誰のものか」と問われる女性奴隷も独立した個人として出てきます。しかし、彼女に台詞はありません。また、他にも作中にてしばしば、女性の台詞やすすり泣きなどが挿入されますが、彼女たちのそれらは「背景」でしかありません。彼女たちには「顔」や「名前」がないのです。繰り返しますが、独立した個人として「声」を獲得している女性はヒュパティアだけです。また、ヒュパティアを慕う男性たちはしばしば、彼女の「口」を「Lady」と呼びます。これらのことから、ヒュパティアは作中全ての「女性性」を一身に背負っていると解釈することもできます。しかし、そのヒュパティアも、先述のように、かつて従えた奴隷ダオスによって、文字通り口を塞がれ「声」を失い、殺害されます。ヒュパティアの死と共に、彼女が一身に引き受けていた「理性」、そして「女性性」の「声」もまた消滅するのです。

ところで、古代、アレクサンドリアではギリシア語が用いられていました。また、本作はアレハンドロ・アメナバルというスペイン人の監督が製作していなながらも、

台詞は全て英語が用いられています。英語を用いて撮影されたフランス映画やイタリア映画などであれば、瑕疵に該当する可能性もありますが、本作が現代批判という側面を持ち、今日においても「英語が世界において支配的な共通言語」とされている以上、瑕疵にはならないことに注意しておきましょう。

最後に、原題が『AGORA』であることにも注目してみましよう。アゴラとは、古代ギリシアにおける公的な広場を意味しますが、それは「市場」としての意味を持つものでもありました。作中においては、地球を宇宙から俯瞰するシヨットが何度か挿入されますが、そのような世界的な意味での「市場」、すなわち「グローバルマーケット」による世界支配」という意味が込められている可能性も頭の片隅に置いておきたいところです。

しおん

夜は深く沈み

凧いだ海と矩形の景色に

ナトリウムランプが浮かんでいる

潮の香りはない

空気は微かに湿り

無機質に打ち寄せる波は

テトラに触れ

静かに崩れていく

月と星が流れた

紫苑色の花束を海に

細いメンソールに

とーい

火をつける

紫苑色が月に寄り添った
そして 輪郭を失う

汽笛がきこえる
空が藍色に変わっていく

連 載

白い家（第一回）

AYA

1. 奈緒

はじめて泉を見たとき、単純にすごく綺麗な子だと思った。

着ているものはそっけないほどシンプルで、ジーンズと無地のシャツをよく着ていた。いつもスニーカーで、化粧は一切しないで、肩の下で切りそろえた髪も、染めずにそのままだった。その飾らない装いが泉にはよく似合った。

よく大学の構内で見えるような、金魚の尾ひれのような軽やかでふわふわの服を着ている子たちとは、全く違った雰囲気を持った子だった。可愛いのにどこか頼りなくて、短すぎるスカートや、無防備に出た肩のラインがだらしなく男の子たちの視線を誘う女の子たちとは違い、彼女はどこか周りを遮断しているような空気を纏っていた。泉の周りには体を上に上に引き上げる見えないピアノ線がいくつもついているようで、その佇まいはときどきはっとするほど美しかった。

泉は大学の同じクラスで知りあったけど、大学が始まって三か月、泉には誰も仲のいい友達がいなかった。

大学にはちゃんと毎日来ている。挨拶をされればきちんと返す。愛想が悪いわけでも、暗いわけでもない、ごく普通の子だったけど、泉はいつもひとりでもどこか完結しているようで、周りに誰もいなくてもちつとも淋しそうじゃなかった。自分のありのままの状況をそのまま受け入れて、それで充足している、いつもそんな風だった。

でも、クラスみんなは、男子も女子も、みんな泉をどこかで気にしていた。目立たないけど、よく見ると確実に綺麗な子、アイロンがかかった白いハンカチのような、ぱりっとした清潔感のある子。それが泉だった。

「川村さんって、シャンプーとか、洗剤のCMに出てきそうな子だよな」
クラスコンパの幹事の男の子が、出欠の確認をしに泉に話しかけた後、そんなことを言っていた。なかなか真理をついている。

結局、泉はクラスのほとんどの子が出席したコンパに、用事があるから、と言ってこなかった。

泉に初めて話しかけたのは、昼間のランチだった。

大学に入るまで、ひとりで本ばかり読むガリ勉だったから、正直、大学の雰囲気は疲れ切っていた。女の子はみんな髪を明るい色に染めて、マニキュアを塗って、可愛

いスカート姿で学校に来ていた。

構内に響く、男の子に対する媚びを充分に含んだ甲高い声も、繰り返されるサークル交流という名のコンパも、必修科目のノートを貸しあうのも、ほとほと疲れ切っていたのだ。

ひとりでご飯を食べられる場所を探して、中庭に出ると、そこに泉がいた。

泉は、ひとりで中庭のベンチでサンドイッチを食べていた。いつもと同じように、インディゴ色のジーンズと、水色の長袖のシャツを着ていた。アイロンがきちんとあてられており、姿勢よく、静かにサンドイッチを食べながら、文庫本を読んでいた。隣に友達がいないことも、ランチの時間に話し相手がいらないことも、まったく頓着していないようだった。

その凜とした姿に、入学式の日から、あたしはきつと憧れていたのだと思う。

「川村さん、だよね？」

あたしは思い切って声をかけた。

「うん。」泉はあっさりとうなずくが、明らかにあたしを認識していなかった。こちらがどぎまぎするほど、まっすぐに人の顔を覗き込んでくる。日差しが強いのか少し目を細めながら。

「同じクラスの上野奈緒です。覚えてない？ 毎日教室で会ってるけど」

「……ああ、思い出した。まえに、授業が始まる前、『西瓜糖の日々』を読んでたよね。ブローテイガンの」

「よく知ってるね」

びっくりした。ブローテイガンは、その内容というより文章のリズムに惹かれて、何度も繰り返し読む作家だ。同学年でこの作家を知っている人間に会うのは始めてだった。

「ここ、座ってもいい？」

泉が、不思議とためらわず、バックをよけたので、あたしは泉の隣に腰を下ろした。

「暑くなってきたね」

「そうだね」

共通点がないので、当たり障りのないことしか出てこない。泉は同意したものの、ちっとも暑そうじゃなかった。汗もかかず、かすかにそよいだ風が、泉のまっすぐな髪を撫でていった。

「川村さん、いつもひとりでご飯食べてるの？」

「うん。そうだね。だいたいひとり」

「淋しいとか、思わないの？」

泉は不思議そうにあたしの顔を見ていた。しっとり濡れているような睫毛と黒目が、

子どもみたいだ、と思う。しばらく、考えて、ゆっくり、

「うん。最近、前より淋しくないかな」

「前より？」その言い方が変わっててのが可笑しくて、なんだか笑ってしまう。

「……うん。前より、だいぶ淋しくなくなった」

泉は何かを思い出してるみたいに、噛みしめながら話した。

「そうなんだ。あたしは最近ホームシックだよ。実家が恋しくてさ」

「実家？ 実家ってどこなの？」

「まあ、群馬だから、すぐ帰れるっちゃ帰れるんだけどね」

泉は話すテンポがゆっくりで、簡単なことを答えるのにもいちいちしっかり考えているみたいだった。

「川村さん、実家このへんなの？」

「うん。でも子供のころは違うところに住んでた。いまはおばあさんと」

「子供のころ、どこに住んでたの？」

「軽井沢」

泉はそこまで言うと、膝の上に広げたサンドイッチの一切れを差し出し、

「ご飯まだだったら、よかったら食べない？」

「え？ いいの？」

泉のくれたサンドイッチはコンビニで売られているようなものではなくて、ちゃんとした手作りのものだった。卵とハムが挟まった、ごく普通のサンドイッチだけど、シンプルな茶色のペーパーナプキンで包まれたそれは、とても泉らしい食べ物だと思つた。

「うん。あたし今日はもう授業ないから。さようなら」

そういうと、ハンカチを畳んでさっさと席を立ってしまった。残されたあたしは、先ほどの泉と同じようにサンドイッチをひとりでベンチに腰かけてほうばる女の子、だったけど、ちっとも様にならなくて、居心地が悪いまま、そのサンドイッチを飲み込んだ。

2. 蒼介

目の前を、あいつが通り過ぎた。

目があった。

まただ、と思う。自意識過剰ではないはずだ。あいつは、いつも俺を見ている。しかも一瞬。視線に気づいて目を向けると、もうあいつの視線は俺からはずれている。あの冷やかな流し目で、いつも一瞥だけくれてそのあとは一切無視を決め込む。話し

かけるわけでもない。でも、あいつは確実に俺のことを知っている、と思う。不思議な確信があった。

どこで会ったのだろう。あいつを見るたび、考えている。向こうが自分のことを知っていて、自分が相手のことを思い出せないのは、弱みを握られているようでひどく居心地が悪い。

俺はあいつとどこで会ってる？

相変わらず色味のない服を着た背中を目で追う。服装や髪形がシンプルでそっけなさすぎて、カラフルなほかの大学生の中で、逆に目立っている。こんな自己顕示欲の塊みたいな大学生の中に入ったら、いつそ色味のないスタイルでいるほうが目立ってしまうことくらい、早々に気づきそうなものなのに。

「蒼介、いっつも川村さんのこと見てない？」

となり座った女が腕を引いた。風が吹けば舞い上がりそうなスカート、腕に何個も付けたチープなアクセサリー、ゆるくふわふわのカールのかかった髪の毛。ごく普通に可愛い女だと思う。顔も、そしてもちろん頭も。

「あの人、川村っていうの？」

俺は顔を近づけて話した。そんなことは何でもないといい風に。君と話してるほうが楽しいよ、と囁くみたいに。

「名前、知らなかったの？」

くすぐったそうに女が言う。そろそろこの女の名前のほうを思いださないと。

「うん。知らない。このあと授業？」

「結衣？ ううん。入ってないよー」

「そう。助かった。どっか行かない？」

「いいね」

女が髪につけている甘ったるくて安くさい香水の香りを吸い込む。俺は安心して立ち上がった。

ほんと、助かった。お前が名前、自分から言ってくれて。

俺は水の音を聞いている。

タイルを叩く、雨のようなシャワーの音だ。渋谷のファミレスから、レコードショップ、スタバに立ち寄り夕方の方のラブホテルにたどり着くまで、正味2時間半だった。すぐにやらせてくれるという噂にたがわず、ここまであつけないほど簡単にたどり着いた。こんなにあらゆる客観的な気分になってしまうと、自己嫌悪を通り越し、くだらない三流映画を見ているような客観的な気分になるから不思議だ。

あいつとは、こういう遊びの過程で知り合った女ではないはずだ。

部外サークルの交流会、一年間通った予備校、高校時代の同級生、高校時代に文化祭で知り合った他校の女子高生……

自分の記憶に眠る女の顔を新しい順に思い浮かべていく。あの他者を寄せ付けけないような背中の女にはなかなかなたどり着かない。

どこだろう。俺はあいつとどこで会ったんだ？

バスルームからバスタオル一枚巻いただけの姿で、結衣が出てきた。

ばさっと音を立てて、広いベッドの端に飛び乗る。

「なあ、お前さっき川村なんとかって人のこと、言ってなかった？」

結衣は露骨に嫌そうな声を出す。たしかにこのタイミングはまずかった。

「なあに、また川村さんのこと？」

「いや、俺じゃなくてさ。篠原っているだろ、俺のクラスの。あいつがね、さっきの川村さんのことを、かわいいかわいいって言うからさ」

この嘘がなかなか気に入ったらしく、結衣は笑って教えてくれた。

「ああ、そういうこと。でも川村さんは無理だよ。クラスコンパにも来ないし、いっつもひとりだし。たしかに綺麗な顔してる人だけどさ、どかがいいの？　なんかあの人ってあたしたちのこと見下してるかんじじゃない？　馬鹿にしてるっていうかさ」

「まあ、そう言うなって。万が一ってことがあるじゃん。川村さん、下の名前は？」

「えつとね、泉だよ。川村泉」

「へえ、高校は？　どことか言ってた？」

俺は話しながら、頭の中のアドレス帳を大急ぎで捲っていく。

「たしかね。高校は行ってないんだって。大検かな？　あとフリースクールとか？」

「ああ、たまにいるよな」

俺は話をそこまでにして、本来の目的を達成することにする。少し濡れた髪を触ると、結衣はくすぐったそうな甘い声を出した。

川村　泉

頭の中にその名前をメモする。あとで家に帰ってから、本格的にあの女を探し出さなくてはならない。

小、中、高と歴代の卒業アルバム、ボーイスカウトの写真、昔のアドレス帳にはナンプで知り合った女の名前も入っているはずだ。探すべき場所が頭の中にいくつも浮かんで消えた。頭の中でめったに鳴らない警報機がひそかに点滅している。

思い出せ、思い出せ、思い出せ。

あの女は誰なんだ？

3. 樹

信号が青に変わると、横断歩道を駆け足で渡り切った。

人の波を抜け、目的のホテルラウンジを目指す。約束の時間まであと5分弱。泉はきつともう着いているだろう。

走りながら、やはり自分は泉に会いたかったのだと思う。いつも泉に会うと、横腹が痛むような、いまずぐここから立ち去りたいような居心地の悪さがあつたが、しばらく会わないと、彼女の頼りない背中が思い出されて、すぐにまた電話をかけてしまう。会っている間は、どういうわけか年下の少女相手に何かを見透かされているようで不快なのに、心のどこかではいつも彼女のことを気にしてしまう。

泉は僕のことをどう思っているのだろう。

宗一郎と違い一緒に育ったわけでもないのに、すっかり彼女の保護者気取りの男。勝手に自分の祖母の家に住ませ、定期的に自分を呼び出し、小言めいた助言を与える大人。

さぞ迷惑だろう。せっかくあの『白い家』から抜け出せたのに。それでも僕は泉のことが心配だった。

あんなところで、普通の生活とはかけ離れた思春期を過ごして育った人間が、いざ普

通の生活に戻ったところでも、社会に適應できるわけがない。自分もまわりの人間に比べれば変わったバックボーンを持っていると思っていたが、彼女の境遇の異常さは僕の比ではなかった。泉のことを気にかけてあげれば、気にかけてくれるほど、あの家の人間の神経が信じられなかった。

泉はあの氣狂いの老人と、ひとりの少年に、人生を狂わされたのだ。

すでに泉に良識ある大人である身寄りがない今、彼女をきちんと成人させ、社会に送り出すのは、あの一族の系譜に、本筋ではないにしても関わった僕の義務だと思う。それを彼女が望まなくても。

あまり東京の地理に詳しくない泉のために、渋谷からほど近い丸の内のホテルラウンジを指定した。泉は窓際の席にすでにこちらに背を向け座っていた。肩の下で切りそろえられた髪が陽に透けている。

「泉」

席に着くと、彼女はすっと立ち上がって頭を下げた。

「お久しぶりです」

「久しぶり。学校には慣れた？」

泉を座るように促して席に着いた。相変わらず背中にて規定があてられているように姿勢がいい。

「はい。電車通学にもだいぶ慣れました」

泉をこうして真正面から見ると、これは、これまででも数えるほどしかない。最後に会ったのは彼女が大学に入学する直前だった。

泉の華奢な体に、丸襟の青いシャツがよく似合っている。ブルージーンズにスニーカーというホテルラウンジのドレスコードには相応しくない服装も、彼女の学生らしい清潔さをよく引き立てていて、周りの大人たちも微笑みながら見逃してくれそうな雰囲気だ。

あの『白い家』にいた頃の泉を見たのは、実は二回しかない。一度は宗一郎に呼びだされたのだ。いつものように白い便箋に几帳面に綴られた手紙に従って、雪深い二月に延々電車を乗り継いで会いに行った。そのとき泉は制服のような白いシャツに紺か黒の膝丈のスカートを履いていた。しかも服装はとも女の子らしいのに、髪はベリーショートに近く刈り上げられていた。真っ黒の髪に、理知的な瞳が印象的だったが、彼女のスタイルはあまりにもそつげなく禁欲的で修道女のような感じだった。あれはたぶん、泉の意志でされていた髪形ではなかったのだと、今でこそ思う。

泉はあれからゆっくりと髪を伸ばし、今は肩の下で切りそろえられたままにしている。服装は相変わらずシンプルなものだったが、僕の祖母が趣味にしている洋裁で仕立てられた、適度に柔らかく、明るい色のシャツを身に着けている。

「友達はできた？」

「はい」

泉はゆつくりと言う。

運ばれてきたコーヒを飲みながら、当たり障りのない会話が続く。法学部の授業の話、第二外国語でとったフランス語の話、つい最近まで自分も大学生だったくせに、どこにでもありそうなありふれた泉の大学生活の話題は、不思議と新鮮に、輝いたものみたいに聞こえる。それだけ自分が社会にもまれて、薄汚れてしまっているのだと思う。

学生生活の様子を几帳面に話す泉を眩しく思いながら、それでも彼女との会話は、いつも一枚薄い膜のようなものがかかっている、どこか表面的な話題に終始していた。僕はほんとうに聞きたいことを意図的に隠している。

そして、それは泉も同じはずだ。

彼女が『白い家』を出て、残りの高校過程を終え、大学に入った現在も、泉からあの家の話を聞いたことは一切ない。

僕はあの家の正確な間取りですら、頭の中に描けなかった。

泉がああ家のどの部屋で眠り、どこで勉強をし、どうやって過ごしていたのか。

ほんとうは一番聞きたいことなのに、その話題を出すのははばかられた。その話題を

出した以上、宗一郎との関係を、一緒に兄弟のように育ったとか、よく可愛がつてもらったとか、そんな通り一遍の言葉ではなく、もつと深く問いたださなければいけないような気がしていた。

「そろそろ行こうか。ゆっくりしたいとこだけど、これから仕事なんだ」
僕は伝票をもって立ち上がった。

隣に並んだ泉は、座っているときよりもずっと背が高くて、大人びている。丸襟の青いシャツが造り出す控えめな胸のふくらみから、僕は慌てて目をそらした。

4. 絹江

そろそろ夕飯の支度をする時間だった。

ゆっくりと立ち上がり、ちゃぶ台にのった湯呑を片付ける。

夕飯の支度といっても、自分と泉の分だけなので、大したものを用意する必要はない。泉は好き嫌いがなく、白いご飯とお味噌汁、焼き魚と野菜の副菜一品で満足してしまうような子で、かえって学校帰りに米や重たいペットボトル入りのお茶などを買ってきてくれるので、ひとりであるころより逆に助かっているくらいだ。

ひとり。

樹が家を出て行って、ようやく自分は一ひとりになるのだと思っていたが、泉は不思議なタイミングで自分の前に現れた。

自分の孫の異母兄弟と一緒に育った少女。

私は東京の下町で生まれ、少女時代に疎開先で終戦を迎えた。その後、両親とともに焼け野原の東京に戻り、そこで見合い結婚をし、美保子を生んだ。

一人娘の美保子は、子どもの頃から活発な子だった。物おじせず、まわりの商店街の大人にもしつかりとした口を利く、親の私からしても、驚くようなことを平気でするような子だった。

ひとりで勝手に大学を決め、必死に受験勉強をしたかと思うと、社会勉強と称して朝から晩まで遊び歩き、それでもどうか四年で単位をそろえて大学を卒業した。見合いでもしてくれるのかと期待したが、美保子は自分で就職先を出版社に決め、スーツ姿で忙しく働くキャリアウーマンになった。

今は女性も何でもする時代だからね。

一人娘に人一倍甘かった夫はそう言いながら、大手出版社で働く娘を自慢に思っていたようだったが、美保子が入社三年目で妊娠し、しかも相手の男性と結婚もせずひとりで育てるといったときは、さすがに驚いていた。

相手の男性の名前を、夫の源蔵には決して言わなかった娘だったが、私は樹の父親

の名前を、かなり早い段階から聞いていた。向こうが、美保子が子供を生むことも承知している、ということも。

澤野祥太郎さんって言うのよ。お母さんは知らないと思うけど。

もちろん、私はその相手の名前を知らなかった。だから図書館に行き、経済雑誌をいくつか読み、そこでその男の名前を見つけた。美保子が言ったとおり、相手の男は有名な製薬会社の御曹司で、美保子が妊娠したときにはすでに、ある外交官の一人娘と結婚していた。

父親を知ったところで、どうしたものでもない。

美保子が一度決めたことを曲げないことには、とうに観念していた。苦勞をしてでも生みたい男の子だったのだと、納得するしかない。

一家の主婦としてしか働いたことのない自分がすることは、やはり家族の食事を作り、洗濯をし、家を綺麗に整えることだった。ボタンが取れたといえれば縫い付けてやり、明日までに雑巾が必要だと言われれば朝までには縫い上げた。

じきに夫が亡くなり、出世した美保子は仕事がますます忙しくなり、会社近くにマンションを買い、そこから会社に通った。

美保子がひとりで生んだ子どもである樹は、母親と違い、どちらかというと内弁慶でおとなしく、友達と外で遊びましたが、本質は一人遊びが好きな子どもだった。大

勢の子どもたちと一緒にいなくてはならない場所では、一生懸命そこに馴染もうとしていたが、家に帰ると自家中毒でも起こすのかよく熱を出した。氣立てが優しいのか、いつも友達が多かったが、大きくなってからは大人数でいてもふらりと別の場所に行ってしまうような子だった。

高校生になった樹は大学受験に失敗し、一年間の浪人生活を送ると、その後私立の医学部に入り、やはりこの家から大学に通った。

その間も私の生活は変わらなかった。美保子は高給取りらしいが、相変わらず忙しいらしく、あまりこの家には来なかったが、樹は大学生になっても変わらず、二階の美保子が子供のころに使っていた部屋で勉強をし、忙しい大学生活を送っていたようだった。

樹は経済面で不自由はしていないはずだが、自分の家が母子家庭であることを子ども頃から意識していて、高校生の頃から常にアルバイトをしていたし、大きくなってからは、何かを買ってほしいとか、何かをねだるようなわがママを言ったことはほとんどなかった。

それなのに、はじめてのわがままらしいわがママが、自分の異母兄弟と一緒に育った女の子を、自分の代わりにこの家に住まわせてほしい、だった。

樹は、すでに美保子に話を通し、泉を引き取ることで了承を取り付けていた。ひと

りで大学の近くに安いアパートを借り、それまで貯金していたお金と、アルバイト代で家賃を払っていくつもりだと話した。

むこうの家とどういいう約束事を取り付けたのか、詳しいことはあえて聞かなかったが、泉の親なり、後見人の役割をする保護者はどこかで生きているのだろうと予想している。彼女の学費と生活費は、美保子を通し、それぞれ学校と私に、遅れることなく送金されていた。

俺も詳しくは分からないんだ。ただ、子どもの頃に、澤井家に引き取られてきて、その一人息子と一緒に育つたらしい。

どうやら樹も、成人するまで泉の存在は知らなかったらしい。自分に異母兄弟がいることは知っていたが、最近まで連絡を取ったことはなかった、と。

連絡って、あんた、向こうのお子さんに会いに行つたのかい？

樹は私を安心させるように笑って言った。

手紙をもらったんだよ、澤野宗一郎さんに。その手紙に、書いてあったんだ。会いに来てほしい、これが最後だから、って。

美保子は、自分の父親について、樹の物心がついたときにきちんと話していた。向こうに一人息子がいることも。

樹は自分に父親がいないことも、母子家庭で育ってきたことも、苦には感じていな

い様子だったが、自分と血のつながった兄弟には関心があつたのだろうか。まさか美保子も、樹が自分の異母兄弟とこつそり連絡を取り合うとは思つてもいなかっただろう。

樹が大学四年生の冬だった。

東京にも、舞うように細かい雪が降つた日、泉は、真つ黒な短い髪をして、姿勢を伸ばして、この家の玄関口に現れた。小さなくたびれた革のポストンバックを持つていた。紺色のダッフルコートがよく似合っていた。

泉は、きちんと頭を下げ、それでも私を見つめる目には、一切の媚びを含んでいなかった。他人の家に世話になる、という事実を、ごくあっさりとして、当たり前前に受け入れていた。そこには自己憐憫も、同情を引くようことさら不幸ぶるしぐさも、一切感じられなかった。

むしろ緊張していたのは、隣に立つた樹のほうだったろう。泉のことを何と呼んだけれいのかも分からず、ためらっていたようだった。

美保子も最初の頃は、この家に泉の様子を見に来たが、それなりに均衡が保たれているのを確認すると、またすぐに自分のマンションに戻った。

泉は、もうすでに高校生の年齢だったこともあるが、美保子より樹より手がかからない子だった。

泉は誰かに声をかけたがるような子ではなく、食事の支度や、家の手伝いを私に言われればきちんとなしたが、それ以外はたいいてい勉強するか本を読んでいるかのどちらかだった。

余計なことは一切話さないが、いつも外見ににじみ出る精神状態や感情が安定していて、ぶれることがない。稀有な境遇で育ち、それは大人の私から見ても決して幸福とは言えないのに、泉には他人の家で育った人間にありがちな卑屈さや臆病さが微塵もない。

よく躰けられた猫を一匹飼っているような気分だった。

近くにいる気配はするが、こちらの視線には入らない。食事の時間にはきちんと戻ってきて、またすぐにどこかにいなくなってしまう。

そして、私は、自分の生んだ美保子より、孫である樹より、血の繋がらない泉のほうが、本質的に自分と似ていることに気づいていた。

たったひとりで満ち足りているかんじ。

泉を見ていると、私もこうして一人で裁縫をしている時間が何より好きだったことを思い出す。周りに誰がいても、ひとりきりでも、うるさくても一向に構わない。細かく手を動かしていれば、自分の中にある、ポウルに入れた水のようなものが常に風いでいて、その音を聞いていればいつまでも安心していられた。

泉は何の抵抗もなく、私が仕立てた服を着てくれ、そしてその装いがよく似合っていた。美保子に着せれば、いかにも保守的で流行遅れの布を無理矢理着せているような雰囲気だったのが、泉はもともと持っている色が少ないのか、体が既成サイズに近いか、オーソドックスに仕立てた洋服が、嫌みなく似合っていた。

あの子は、樹の兄弟かい？

私は泉を引き取ると聞いたとき、真っ先に美保子に確認した。たぶん、早くから樹の気持ちに気づいていたからだろう。樹自身も自分の気持ちにうすうす気づいていたから、自ら家を出たのだろうし、厄介なことは当然避けたかった。違うわ。

美保子はきつぱりと言った。もちろん違うわ。母親も父親も知ってる。祥太郎さんじゃない。

美保子の口からその名前を聞くのは二回目だった。それにね、美保子は続けて言った。それはたぶん、樹も知ってると思うわ。

(第二回へ続く)

マイ・フリーリッシュ・ハート（第一回）

る

部屋だった。

それは紛れもなく部屋だった。バウムクーヘンを一口に平らげようとして大きく開かれた少女の口の中ではなかった。当たり前だ。それは部屋だったのだ。部屋を一望すると、家具と呼べるものは一切配置されておらず、窓から覗くビルの群によってここが地上何メートルに位置しているかが知れた。斜めから差し込む西日が夕暮れであることを告げていた。僕はそこまで知ると手持無沙汰になってしまい、部屋の壁紙を見つめていた。キヤラメル色のダイヤ型の模様が全体に施されていて、見る角度によってひとつひとつのダイヤは拉げたり増幅したりとその姿を変えた。そうして部屋を一周したのだ。30秒もかからなかった。

一面に施されたダイヤの模様の中にひとつの傷を見つけた。それほど深い傷ではなかったが、整然と立ち並ぶダイヤの中でその傷はひどく特異な存在に思われた。赤ちやんのつるんとした肌に五十を越えた中年女のシミが浮き出ているのと同じ道理だった。僕は、そのダイヤと傷の関係性を考えていた。それはミックジャガーとキースリチャーズの関係とは少し似ていたが、ピラミッドとアメフラシの関係とはかなり違

つていた。僕は腕を組んでその関係性に名を与えようと脳を濡れ雑巾のように絞っていた。西日が傾きを増して部屋はさらにオレンジに満たされていった。こんな話を聞いたことがある。ある人物が無人島にいきつき、そこに打ち捨てられた自転車を見てペダルと車輪の関係性を考えることから詩は始まるのだ、と。

そう、僕は詩人なのだ。

パイナップルとわさび醤油だ。

タンカストン

タンカストン

部屋に唯一取り付けられたドアの向こう、おそらく構造上そこには廊下が続いているのだろう、そこから、

タンカストン

タンカストン

と足音のするのが聞こえている。僕は恐ろしく複雑な靴を履いた人物のことを想像

した。その靴というのはとてつもなくつま先の底が高く、ハイヒールとは全く逆の構造をした代物なのだ。そんな靴を履く人間なんて気がふれているに決まっている。僕はその靴を履いたつもりになって、つま先をきゅつと足の脛の方向に引き寄せてみた。ひどい緊張を感じた。おそらくこんな緊張を自身に課す人間というのは恐ろしく高貴な身分に違いない。ヨーロッパの貴族がコルセットだなんてよくわからない服飾を着ていたのと同じ道理だ。やつらは絶えず自らに緊張を強いていないとどうにかなってしまうのだろう。

タンカストンスタタン

足音が部屋の前に止まるのを確認すると、僕は彼、或いは彼女をどうやって出迎えるようか、と思いを巡らせた挙句、ひどくシンプルな方法でそれをするに決めた。つまりただ立ち竦んでいた。そしてドアが開く音がした。

彼——それは一目で男だと分かった——はやはり恐ろしく複雑な靴を履いていたが、僕が想像した代物とは少し違っていた。しかしもしその靴の出来様を描写するとなると百科辞典一冊分の記述がなされなければならないだろう。その靴の成り立ちから、歴史、機能性、いや反機能性、まわりに与える影響、などなど、その靴が纏って

いる様々な価値、ないし無価値は膨大であった。

「靴に興味があるようで」彼の声はひどくマイルドな調子で響いた。最初僕は靴から声が出ているかのような錯覚を受けた、それほどその靴が纏っているものが膨大だったのだ。話ができるくらい予想の範疇だ。

「靴に興味があるようで」今度はすこし硬質な声音で聞こえてきた。僕はようやく靴から目を離し彼の顔を見た。顔が長く、趣味のいい口髭を蓄えた紳士であった。

「靴が喋っていると思っただんです」僕はそういうとまた靴の口と思われる部分——それほどにこの靴は多くを纏っているのだ——に再び視線を落とした。

「でしたら靴と喋っていたとしても一向にかまいません。私のほうでも私の口が喋っているのか、それとも靴が喋っているのか、あなたに首尾よく理解していただくことはできませんから」

彼は続けた

「おそらくこの二つの仮説、私の口が喋っているのか、それとも靴が喋っているのか、というこの二つの仮説というのは、ある意味において両立しているものだと思いますから」それでは、と僕は靴が纏う目的——これは「もくてき」ではなく「めてき」と読む——な部分を凝視しつつ聞こえてくる声に耳を澄ました。

「あなたのことは随分綿密に調査させていただきました。私の申していることはおわ

かりでしようか？」

僕はこの言葉を聞いたとき、ある事柄を確信した。彼もまた詩人なのである。僕が調査される必要があるとするならば、それは僕が詩人であるという一点に限る。問題はその調査というものが、ネガティブな、つまり詩人であることの不道徳性を暴くためのものなのか、それとも、このご時勢において詩人の地下組織なるものが存在して、僕をその仲間に加えるための資格を僕が有しているかを調べるためなのか、ということである。僕は、彼の靴が極めて詩人的であることだけに頼って彼もまた詩人であると確信した。彼は僕の味方だ、と。普通の人間、つまり夏目漱石や森鷗外を至高の存在と考へ、小説こそ全てと考へている人間はたいていつまらない靴を履いているのだ。「大体のことは。あなたたちは詩人であり、僕を仲間に加えようとしている」

「察しがよくて助かりますね」

「あなたの靴を見れば分かります」そう言うと彼はホツとしたのか、入室時から漂わせていた緊張感を少し和らげた。靴もまたリラックスしたようだった。そういう風に見えた。それを感じて僕も幾分か寛いだ気分になつて話を続けた。

「でもどうして私なんかを調査したりしたのでしょうか？」

「そこには深い理由はありません。詩と同じです。この世にはおよそ深い理由なんてない、というのが我々のスタンスでは無いでしようか？」

「まあ、確かに」そう僕が受け答えしてる時、彼はポケットから——それもまた詩的なポケットであり、特徴をひとつあげるとしたら穴が7つも8つも開いていた——何かを取り出そうとしていた。僕はそこから取り出されるだろうものに色々思いをめぐらせた。拳銃、それは少しギャング的すぎた。名刺、これではあまりにもサラリーマン的だし、同時に退屈な小説的でもある。現金、これはハードボイルドの類だろう。アポロチョコ、これでは無垢な少年的すぎる。などとあれこれ考えを巡らしているとついに彼はあるものを手の上に載せて僕の目の前に差し出した。

「これをあなたに託します」

それはフジツボだった。紛れも無くフジツボだった。

「でもこれは、フジツボですよね？」そう僕は彼に問うた。

「ええ、フジツボです、あなたがそう考える限りにおいて」男は意味ありげな顔をして答えた。

「そこにはおおよそ深い理由なんてない」

「そこにはおおよそ深い理由なんてない」

二人は確かめるように同じ台詞を繰り返ししばらくの間虚空を見つめていた。僕の手にはフジツボがぼつんと置かれていた。

部屋から解放され、戸外へ出ると、空は色彩を無くし、世界は空気に満ちていた。お手本通りの曇り空だった。僕は行くあてもなく街をふらつきながら先ほど起きた出来事について思いをめぐらせた。思い返すと、それは奇妙な出来事であった。まず、僕たちは一切自己紹介めいたこともしていない。彼は僕のことを調査したと話したが、調査をしたわりには、主な出来事としてはフジツボを渡されただけなのだ。そして僕は彼が詩人であることに思い至った、「そこにはおよそ深い理由なんてない」結局のところそれに尽きるのだ。

スーツのポケットに入れたフジツボを右手でいじくりながらデパートの屋上でアイスクリームを買った。どんよりとした曇り空の下でメリーゴーラウンドが動いている。小さな女の子らが夢中になって前の木馬を追いかけている、けれどいつまでもたっても追いつくことなどできなかった。その中に混じって中年の男性が上下する木馬に揺られていた。彼もまた詩人なのだろうか。彼は一心不乱に中空を見つめていて、僕もまた彼の視線を追いかけるように中空を見つめた。そこには暮れ初める世界の一端に色とりどりのアドバルーンが浮かんでいた。視線を戻すと彼はもういなかった。彼の座っていた木馬だけが取り残されたように虚しく上下していた。そこだけとてもスローな時間が取り残されていた。彼もまた詩人なのだろうか。「あなたがそう考える限りにおいて」と先ほどの男の台詞が脳裏に響いた。

でたらめに脚を動かしていたらいつのまにか家に着いていた。もう7時を回っていた。道中で買った今日二つ目のアイスクリームに舌を這わせながら扉を開けると、そこにあるのはいつも通りの部屋で、本やCDがいたずらに散らかっていた。安心した。午後を訪れたあの不思議な部屋がまだ脳裏にこびりついていたので。安心して、晩飯と風呂の準備をして、出来るだけ今日起きたことを思い出さないように努めた。しかし本格的な夜が訪れるとそれは無理な相談だった。夜は自然とカーテンの隙間から忍び込み、部屋の明かりと混ざり合いながら消滅しつつ、それでもその痕跡は蓄積され、夜特有の追憶の気分を僕の中に形成していった。眠れなくなった。

ウイスキーを一口飲んで、眠れない夜に、気泡のように浮かんでは消える記憶を手慰みにもてあそんでいた。僕はその当時まで19歳だった。日本政府は文部科学省に捜査権と逮捕権を与えた。もちろん、詩人を取り締まるためだ。社会は常にターゲットを探しているのだ。時に同性愛者であったり、時に精神異常者であったり。それがたまたま詩人に順番が回ってきたのだ。僕はその時テレビを見ていた。見せしめとして詩壇の長であった谷川俊太郎が逮捕される瞬間に、だ。彼が逮捕される瞬間に吐いた台詞は、「そんなのつてないよ」だった。とても詩的な言葉だ。その台詞が日本における最後の詩となった(少なくとも公的には)。「そんなのつてないよ」僕は寂寥とした部屋で独り言のようにそれを呟いてみた。すると、切り分けられたメロンの一番甘

いとところをスプーンですくう様な爽やかなムードが夜に寄り添い、僕はいつものまにか眠りについていた。

夢を見た。いくつかの夢を。

僕は記憶をなくした少女と海岸を歩いていた。そこにはわずかなわだかまりも、ぎくしゃくしたところも存在せず、ごく自然に僕たちはさらさらとした砂をふみしめていた。海岸は閑散とし、波打つ水の音がとてもシャープに響いていた。少女は白っぽいワンピースに麦藁帽子を被っていた、中学生くらいに見えた。僕に先立って彼女は歩いていった。時折海から訪れる海風に帽子を押さえながら、肩甲骨まですらっと伸びた髪を風に靡かせていた。僕は彼女がおそらく記憶をなくしていることを知っていた。どう知ったかはわからない。そこにはおよそ深い理由なんてないのだ。彼女は波打ち際まで行って、わずかばかり白くなった波頭を足首で粉碎していた。眩いばかりの夕暮れだった。

「かなしいってどういうことなんだろう」彼女は振り向いて僕に聞いた。

「何か大切なものを失う時、人はかなしむのだと思うよ。君だってとてもラディカルに何かを失っているじゃないか」

「私にはそれがわからないの。失ったことすら失ってしまったの」

「ラディカルに」

「そう。ラディカルに」

少女はそう言うのと波打ち際から浜辺に戻ってきて、僕の目の前に立った。

「あなたは大切なものを失ったの？」

「僕もまた失ったことすら失ってしまったのかもしれない」

「あなたがそう考える限りにおいて」

「そう。僕がそう考える限りにおいて」

水平線が綺麗だった。

仕事場は家から二駅離れたところにあつた。それは小さな出版社であり、僕はその翻訳課で仕事をしていた。とはいへ、僕がするのは翻訳ではなく、出来上がった原稿が日本語として間違っていないかチェックするのだ。時に文章というものはねじくられて腸捻転を起こし最初と最後では全く違うことを言っていたり、脱臼して何かが欠落していたりした。僕の仕事はそれぞれ一文一文を読み込んで、ちゃんとした日本語に整えることだった。僕はこの仕事を一種のアイロニーだと感じていた。腸捻転を起こした文章や脱臼した文章というのはある意味で詩だった。僕はそいつらの肩をとんとんと叩いて、冷静になれよ、と呟くのだった。そうすることによって、言葉は退屈な小説や論文の形式を取り戻すのだ。翻訳課で扱う仕事は、哲学書や小説から犬の躰け方の本まで様々であつたが、詩だけはそこに含まれなかつた。そこまで文部科学省

のプレッシャーがかかっているのだ。

僕は午後の最後の仕事に取り掛かった。それはビル・エヴァンスの『ワルツ・フォー・ドヴィー』というアルバムの楽曲リストの和訳だった。簡単な仕事であるはずであったが、僕はそこで驚くべきものを目にした。『マイ・フリーリッシュ・ハート』という楽曲があるのだがその楽曲名の翻訳には不躰に「不整脈」と書き込まれていた。僕はこの仕事を担当した当人のことを思い出した。頭の禿げかかった、中年の男性だった。専門的な英語の仕事はこなさないにしても瑣末な仕事をよくこなした。二人の娘がいて、どこそこの紛争地で爆弾が炸裂した、なんてニュースよりもその娘の入学式や成績表をより重大な事柄として受け止めるような人物だった。つまり彼は愛すべき人間なのだ。僕は彼の頭に巣作った散文的な考えに思いをめぐらし、「不整脈」と書かれた箇所はそのまま直さなくておくことに決めて、何に言うでもなしに呟いた。

（僕の愚かな心よ。）

街へ出ると様々な人が実に様々な方向へ帰路を求めている。そこかしこに花売りの少女たちが片手を差し出すようにして帰路につこうとしている人たちの視線に名前も知らない花を手向けている。ほとんどの通行人はそんな花売りの少女たちの健気さに答えることも無く無下に歩きさつてしまうのだったが、少女たちは一人の通行人に通り過ぎられる度に「タタラン」と足でステップを踏んだ。最初の一步は自らの背後

に、半ばお辞儀をするが如く後ずさり、すぐにも次の客に相對するためそのステップを踏むのだ。街は少女たちの踏むステップで満たされていた。

タタラン　タタラン

書かれなかった寓話（第四回）

日居月諸

紗江からチャットで声をかけられた時、陸山の手は空いていた。彼女はTwitter 文芸部の実務にまつわる忙しさを気にかけてくれているが——部外者に似つかわしくない律義さに、彼は気後れを覚えた——、雑誌作成にあたって編集長がするべき職務は少ない。雑誌の方針の決定、寄稿の依頼、職務の割り振り、進捗状況の確認、発刊のアナウンス……編集長とは実務をこなす部員を統括し、そこでの成果を外部に報告する役割を持った人間を指すのであって、部員が各々の仕事を全うしてくれば煩わしさを感じることもなどほとんどない。

スカイプにログインしていたのも、部員から声がかかった時すぐ応答できるようにするためだった。何事もなければ、部外者とだつて話せる。

——お気遣いありがとうございます。今は手が空いているので大丈夫ですよ。

だが、と彼は返事をしながら思った。仮に手が空いておらずとも、一旦仕事を放りだして紗江と話そうという気になったかもしれない、と。紗江からのメッセージに目を通した時、陸山は気後れを覚えた。それほど忙しくもないのに、不相応な律義さでもって声をかけられて戸惑ってしまった。同時に、新田の案件を忘れかけていた自分

に気付いてしまったのだ。

文学のことでお話ししませんか。そう書き連ねられたメッセージに改めて目を通してながら、紗江は新田の話題を持ち出すために声を掛けたのではないと確かめる。しかし、相手の意向とは別に、咎められているような気分を覚えた。雑誌を何事もなく発刊させて、新田という部員がいなかったかの如く済まそうとしているのではないか、それと同時に私という存在も忘れようとしているのではないか、それこそ、新田が自らの出自をモデルにした小説から自分の影を消したかのように、全ての事どもをなかつたかのように振る舞おうとしているのではないかと。

それらを踏まえればこれから行う会話は、いかに時間的余裕があらうと、精神的には負い目を伴ったものとなってしまう。

——ありがとうございます。それでは、通話いたしますね。

ヘッドセットを準備しながら、陸山は一呼吸を置いた。考えすぎる必要はない。向こうに咎めるような態度は今のところ見られないし、久しく交流を持っていないのにこちらの忘却が読まれるわけではない。これからの会話はあくまでも共通の趣味をめぐって行われるのであって、共通の知人をめぐって行われるのではない。仮に知人の話題が出たところで、忘却を認めざるをえないならば認めた上で、余計な気負いを覚えることなく、これからの対策をとるに考えればいい。

「こんばんは、お久しぶりです」

通りのいい澄んだ声が聞こえてきた。愛想の良い口振りに裏がないことを確かめつつ、陸山はその明快さに一度身をゆだねることにした。

「こちらこそ」

「本当に大丈夫だったのでしょいか？」

「いえ、実のところ編集長のやる仕事はあまりないんですよ。ほとんどの仕事は他の部員がやってくれて、僕がやることと言えばスポークスマンの役目くらいなものです」
それならよかったです、と安堵を表す声を聞きながら、陸山は先ほどの自分の口振りが自慢めいた調子を帯びていなかったことを確かめた。

「ところで、近々『百年の孤独』の読書会が行われるとうかがったのですが」

「ああ、目を通していただけましたか」

言いながら、手元にある大部の書籍を見やった。渦を巻くような一本の道が、両端を煉瓦で出来ていると思しき城壁によって囲まれている。城壁には夥しいまでの黒い三角屋根が設えられ、それらは霧の降りた曇り空へと伸び、ところどころに葉の落ちた針葉樹が植わっている。城壁が建っているのは砂漠だ。砂の地面には風の跡と思しき縞模様 that 刻まれ、城壁の内側には白いオブジェとも思しき舟に乗った子どもが、螺旋の中心に向かって進んでいるのだか立ち止まっているのだかわからない姿で佇ん

でいた。

「やはりレメデイオス・パロをトリミングした表紙をお持ちなのですね。学生時代は旧版で読んでいたせいで、『作品集』版の表紙では読んだ気にはならないのですよ」

「まさに砂上樓閣という感じで、とてもいい表紙だと思います。マコンドの行く末を暗示している。かといってネタバレではない。本を開く前は表紙に描かれている事にあまり目を向けられないけれども、しつかりとした印象は残る。そして本を読んだ後に、表紙に描かれている細部が鮮明に浮かび上がってくる。装丁と内容が噛み合った著作というのには、芸術品としてあるべき姿じゃないかな。芸術というのは、たとえば絵画は絵画、小説は小説、といった具合にジャンル分けされるべきではなく、もつと複合的に出来るべきだと、『百年の孤独』の装丁は教えてくれる」

ええ、という声が返ってくる。ともに『百年の孤独』を読み終えていることは明らかだった。

「もしかしてこちらのアナウンスを見て、読もうと思いたれたんですか？」

これにも肯定してくれて、こういったところでも律義な人なのか、と相手を見上げるとともに、陸山は心置きなく文学の話が出来るだろうという予感に心が沸き立った。「小説もとても複合的に成り立っていますよね。同じような名前によって続いていく家系が、同じような出来事を繰り返しつつ、繁栄と滅亡を迎えていく。しかもそれら

はあくまでも偶然のように継起していつて、後から見れば必然であったのかもしれない、という具合にとにかくすべての事が複雑に絡み合っていく」

「それこそ、小説の本来あるべき姿、といったところでしょうか」
「まったくもって」

そう言うのと、向こうから微かな笑い声が聞こえてきた。そこで彼は自らの声が勢い込んでいたことを知り、苦笑した。

「でも、改めて読んでよかったですよ。昔読んだ時は物語の筋を追うのに精一杯だったけれど、実際に書き手として読んでみると、あまりに参考になるところが多かった」
「私も昔読んでいた頃はとにかく圧倒されるばかりだったのですが、実際は何も読んでいなかったと思います」

「描写の鋭さもそうなんです、物語の組み立て方についても同様で、序盤を読み進めている間は手垢のついた感じが否めなかったんだけど、実のところそれは、日本文学があまりにガルシア＝マルケスを模倣しすぎたせいなのではないか、という印象を持ちました」

「そうかもしれないですね。安部公房や中上健次はいわずもがな、影響を明言していない作家達も、知らず知らずガルシア＝マルケスが作り出した型を踏襲しているのかもしれない」

落ち着いた口調に接しながら、それに引き換え自分の声がなんと浮き足立っていることだろう、と陸山は自嘲した。会話をしようとしているのだからわからない一方的な言葉を投げているのに、向こうは当意即妙な言葉で応じてくれる。

「いやはや……」

溜息をつきながら、普段使わない言葉を使ってまで感に堪えぬ様子を表そうとした。それは『百年の孤独』もさることながら、音声だけでしかやり取りができない文学の知識に長じた女にも向けられていた。会話を行う前に覚えた緊張は、最早ほぐれきってしまったている。

「打ち明けると、僕はガルシア＝マルケスに対して好ましくない思いを抱いていたんです。『百年の孤独』はまだ小説を書いていない頃に読んだ。小説を書くようになってから、『予告された殺人の記録』を読んで、この徹頭徹尾計算されたような小説は、はたして小説のあるべき姿だろうか、という疑問を抱いた。勢い込んで、ガルシア＝マルケス、いやマジック・リアリズムは葬らなければいけない、とさえ思い込んでしまった。でも、この小説を読んで、そんな考えは浅はかだった、と思い直しました」

「けれど、そう言いたくなる気持ちはわからないでもありません」
そうした応対の仕方に気配りを感じた陸山は、いや、と差し出された手を断りかけた。しかし、

『百年の孤独』もあくまで計算によって成り立っている小説でしょう」

と強い口調で言われたので、思わず口をつぐんでしまった。そこで生まれた空白が
かつて覚えた感触と同じものだと思いつつ、ややあつて、それはどういう点で、と
訊ねると、

「まず、ブエンディア一族が歩んだ歴史は言うまでもないですね。最初に、始祖とい
つてもいいホセ・アルカディオ・ブエンディアが、又従妹のウルスラ・イグアランと
結婚する。そして、彼らから四代下って生まれたアマランタ・ウルスラが、甥のアウ
レリヤノ・バビロニアと結婚する。最初の血のつながった者同士から産まれた子供は、
健全な姿で現れましたが、次の血のつながった者同士から産まれた子供は、奇形児と
して現れてしまった。繁栄の起点となった出来事と、滅亡の起点となった出来事が対
照になっているのですね」

「ええ、しかし、それは仕組まれた展開という感じは受けません。蛇行に蛇行を続け
つつ、似ているようで似ていない出来事が継起しつつ、四代に渡ってブエンディアの
系譜が重なっていき、そのうちに、禁忌とされていた出来事が起こってしまうから、
あくまでも偶然の末に一家の秘密に出会ってしまった、という印象を覚える」

「小説としてはありがちな手法ですが、そのありがちな手法をよく咀嚼できているの
ですね」

ありがちな、という言葉に少し引っかけかりを覚えた。確かに訳者も指摘しているように、『百年の孤独』は伝統的な手法によつて成り立っている小説だ。全ては予告されており、偶然に継起していると思われる出来事はいずれも必然のものだった……そんな小説はありがちである。だが、訳者に指摘されるのと、紗江に指摘されるのでは、少しばかりニュアンスの相違を感じた。その相違がどのようなものかは測れなかったが、読書における仲間から聞こえた声は、彼をわずかにムッとさせた。

「まあ、そのあたりは表立って明らかにされているので、計算とさえ呼べないものだと思います」陸山の気掛かりをよそに話は続けられる。「問題は、表立って明らかにされていない部分……」

「明らかにされていない部分？」

中途半端なところで声が途切れてしまったため、思わず相手の言葉をそのままに発してしまった。

「本当は明らかにされているのですけれどね。ただ、読者は本筋を追うばかりで、脇に続く筋は読み飛ばしてしまいかねないと思うのです。ブエンディア一族が一心不乱に生きている傍らで斃れていった無数の人々を」

それまで明快に発せられていた声が、トーンがそのままであるにもかかわらず、曇りがかかっているような雰囲気帯びた。それまでは全ての言葉が聞き手に向かって届

けられていたにもかかわらず、途端に話し手の内側にこもりだした。

「確かに、この小説ではよく人が亡くなる。二代目のアウレリヤノ・ブエンディアは革命軍の大佐になって、無数の人々を戦乱に巻き込んでしまった。四代目のホセ・アルカディオ・セグンドも労務者たちと結託してストライキを起こして、鎮圧されてしまふ」

ひとまず、投げ出されてしまった言葉を引き取ることにした。これまで好き勝手に喋っていたにもかかわらず、会話を会話として成立させてくれたことへの返礼でもあった。果たして相手からは、そう、という領きが聞こえてくる。が、

「ただ、こう言ってしまうと語弊がありますが、それらはあるべき犠牲のようなものですから。アウレリヤノ・ブエンディアは、義憤によつて革命を企てた。ホセ・アルカディオ・セグンドも、経緯はどうかあれ義憤によつてストライキを企てた。彼らに従った者も、同じ志を戴いていたわけですから、死ぬことは本望だったと思います。死ぬことを本望としないままに、ブエンディア一族によつて殺された者もいた」

そう言われるとようやく思い当たる節が浮かび、陸山は手元の本を開き始めた。しかし、ただでさえ大部の書籍をめくるのは一苦労である上に、万事がめまぐるしく流転する小説の、本筋から逸脱した出来事に行き当たるには一層の苦労を必要とした。このページでもない、この名前でもない、とシラミ潰しに小説のエピソードを当たっ

ていく間、忘却していた出来事を不意に思い起こさせられ、後ろめたさに急き立てられながら記憶を掘り起こすような感覚が陸山を包んでいた。

「たとえば、プルデンシオ・アギラル」聞き覚えのある名前が、澄んだ声によつてあつさりと発せられた。「初めの血のつながった夫婦を嗤つた男ですね。奇形児が生まれることを嫌つて性交せずに暮らしていた夫婦は、噂の的となつてしまい、その中でも特にプルデンシオの取つた態度は夫の氣に障つた。闘鶏に負けた腹いせに、これでお前の不能は慰められるだろう、と嘲つたために、彼はホセ・アルカディオ・ブエンディアの放つ投槍に突かれて死んでしまふ。憤りの収まらない夫は妻を焚き付けいよいよ性交に及び子を宿すのですが、彼らが改めて愛を確かめ合うきっかけを作つた男は、怨霊となつて夫婦の下に現れ続ける。自業自得であり、逆恨みといえればそれまでですが、怨霊の影におびえた夫婦がそれまでの町を離れて旅に出たと考えると、歴史の立役者ともいえるわけです。プルデンシオ・アギラルは、マコンドの繁栄と滅亡の、きつかけとなつた人物なのです」

陸山がようやくプルデンシオ・アギラルの名前を見つけた時、一旦話は区切られた。紗江の話すあらすじに間違ひはなかった。全体のあらすじを述べるだけでも容易ではない小説にもかかわらず、二度読んだ者でも思い出すのに時間がかかった細部のエピソードを滔々と述べてみせる様子に、この女の不気味ともいえるまくしたてるような

口調が再び現れた、と陸山は身構えた。

「この小説はブルデンシオ・アギラルのエピソードが示すように、一族だけの歴史を書き連ねたものではないのです。私はむしろ、叙述の数こそ劣るとはいえ、一族以外の者たちにこそ重きが置かれた小説ではないかと思っと思っています。他に例を挙げるなら、一族の滅亡のきっかけとなったアウレリヤノ・バビロニアの父である、マウリシオ・バビロニアですね」

ああ、そうか、と陸山は納得の行った口振りを示した。見当は外れているかもしれないが、それ以前に一度紗江の口調に歯止めをかけておくべきだと感じた。

「マウリシオ・バビロニアは、四代目の子孫であるメメが想いを寄せた人だったね。だけど、母親のフェルナンダは娘の想い人を快く思わない。そして、夜這いに来たマウリシオを、仕向けた夜警達の手で殺してしまう。けれど、彼らの子供は産まれてしまった。後に奇形児を産むこととなる、ブエンディア家の血を絶やすこととなる子供を産んでしまった」

そうですね、という相槌が、自らの話す梗概に間違いのないことを認めてくれる承諾であると解釈しながら、彼は話を進める。

「一族の外部にいる人間を退けることによって、最初は繁栄のきっかけを得るんだけど、二度目は滅亡のきっかけを得てしまう、というわけか。そこにこそ計算がある、

なるほどな……」

「さすがですね。私の言いたいことを見事に汲み取ってくださった」

またまた、と照れ隠しに贅辞を払いのける口振りを表しながら、すべての解釈が紗江の口から放たれなかったことに、陸山は安堵を覚えた。これは一種の抵抗でもある。陸山から口が挟まれることのないまま話が続けていけば、ありがちだ、と指摘した紗江の解釈は揺るぎないものなってしまうていたかもしれない。『百年の孤独』に相應の価値を見出している自分さえも、ありがちな人間であると烙印を押されてしまうかもしれない。

たとえそちらから与えられたヒントを駆使しながら述べた言葉であろうと、先読みが出来るからにはそれもまたありがちなのだ、と言外に主張することで陸山は抵抗を示そうとした。あなたは誰にでもわかる一般的な解釈をしているだけであって、『百年の孤独』そのものに宿る固有性を汲み取っているわけではない。どれだけ読もうと読みとりきれない魅力が、この書物にはある。

「ただ、計算はそれだけには留まらないのです」一息つきかけた瞬間に、また澄んだ声が発せられた。「そうした細かな出来事の反復と同様に、大きな出来事の反復がある。枠組みの反復、と申し上げてもいいですが……」

「枠組みの反復？」またも陸山は相手の言葉を繰り返した。

「先程陸山さんが挙げておられた革命のための戦争とストライキ。ブエンディア一族の歴史は、そうした支配への抵抗の歴史ともいえます。中心と周縁の対立、と言うと有り体でしょうか」

有り体、という言葉は言わずもがな陸山の意識を過敏にさせた。だが、稼働速度を高めた頭脳は一方で紗江の述べるだろうことを、おぼろげながらに予測し始めていた。「結局のところ、マコンドとともにブエンディア一族は滅びてしまい、歴史の忘却に晒されてしまうわけですが、同様に、ブエンディア一族から忘却された歴史もある」

「プルデンシオ・アギラルや、マウリシオ・バビロニアのような、ブエンディア一族から排除された者たちの歴史」

「そう」肯定が返ってきた。「アウレリヤノ・バビロニアの闘争は、和平という形で終焉した。ホセ・アルカディオ・セグンドの闘争は、弾圧という形で終焉した。そういった具合に、ブエンディア一族の反抗は国家によって鎮圧されてしまう。同様に、ブエンディア一族も外部の者たちを排除し続けてきたのです。プルデンシオ・アギラルは、夫婦の誇りを取り戻すために殺された。マウリシオ・バビロニアは、世間体を気にする恐妻によって殺された」

「家もまた国家と同じように共同体であるわけですね。共同体であるからには、外枠めいたものを作って、内側を守らなければいけない。そして、外部の者を排除しなけ

ればいけない。ブエンディア一族の歴史は、あたかも国家の縮図でさえありうる……」なるほど、と陸山は感嘆をもらした。

「鋭い解釈だと思います」

「いえ、これもまた他所から借りてきた言葉を当てはめただけの話ですから」

陸山の賛辞に偽りはなかった。ありがち、という言葉に気を取られて侮蔑するような口調を読み取ってしまったが、考えてみれば現代において小説を書くということは、出揃ったアイディアの中でいかに独自の色を見せていくかが重要なのである。同時に、読者もまた出揃ったアイディアを踏まえた上で、先行する作品との差異を読み取ることが重要となる。

そうした前提を踏まえてみれば、ありがち、という言葉の解釈の仕方に誤りがあったのだ。初めはその言葉に何もかもお見通しである、と豪語するようなニュアンスを読み取った。いっそ、作者の苦労を知らない読者の思い上がった態度であるとさえ思った。訳者の書く、ありがち、という言葉に抵抗を覚えなかったのも、ひとえに訳者は作者の苦労をわかった上でそう書いているのだろう、という予測があるからに過ぎなかった。

今となつては、紗江の発する、ありがち、という言葉は作品の魅力を最大限に取り出すための言葉であったと振り返られる。ガルシア＝マルケスが自らの蓄積してきた

知識と照らし合わせながら、それでもなお新しいものは生まれまいかと葛藤を続けた、その現場を照らし出すための言葉。

「本当に色んな文学を読まれていらつしやるのですね」

「好みに任せて読んでいるだけですよ」

「それでも大したものですよ」

陸山は一通りのことを理解した。もつとも、理解したのは『百年の孤独』の解釈に限った話ではない。『抱擁家族』の時もそうだったが、作品を内部から見るとはなく外部から見ていく女の思考はどのような出自を持っているのか、話を聞きながらずつと気にかけていた。そして、ようやく思考の出自が見えてきた。

「紗江さんは自分の体験に基づいて読書をなさっているのですね」

「そうですね。知識はたかが知れていますから、自分の経験に基づいて、これまで読んできた本に頼って読むしかない」

「そういうことではなくて」言いながら、思わず声色が固くなってしまうのを感じた。「あなたは、自らが歩んできた人生に基づいて読書をなさっている」

「と言いますと？」

そうした返事がこちらの癖を真似しているように思われて、陸山は眉をひそめた。同時に、これまで膨大なる言葉を表出させておきながら、今更とぼけることがあるの

だろうか、とも思った。

『『百年の孤独』を読んでいる間は思い浮かばなかったんだけど、あなたとこうして感想を交換している内に、この小説は新田さんの『横を向いたまま』と似ているところがあると思っただんです』

「あの小説と？」

次にやってきた疑問には、とぼけるニュアンスは含まれていないどころか、明確な侮蔑が現れていた。

「もちろん、プロとアマの差はある。ただ、小説の出来のことは一旦脇に置きましよう。その上で、ブエンディア一族の歴史と、あなたの一族の歴史には、どこか似通うところがある。あなたは自らの一族の歴史を、ブエンディア一族に重ね合わせながら『百年の孤独』を読んだんではないですか？」

一息に言い切ると、続いて沈黙がやってきた。きつとまた強く言い返されると予感していたので、陸山は前のめりになるような困惑を覚えた。しばらく喋り通しであったため、久しく訪れた沈黙は居心地が悪く、何かしらの配慮を用意しなければならないと頭をめぐらしてはみたが、それまで考えていたことを吐き出してしまったがために容易くは言葉が浮かんでこなかった。そうして手をこまねいていると、

「……なるほど、だから新田は私にこれを読ませたのですね」と、ようやく声が聞こ

えてきた。「学生時代に彼がこう言つてきたのですよ、これだけは読まないとモグリだ、と」

久しく頭に思い浮かべていなかった声呼び起こされた。アマチュアにありがちな血気に逸つた口調、聞き手の心象も構いなしに物事を軽々と断定してしまふ口調は、確かにこここのところ聞いていない、姿を見せなくなった者のそれだった。

「だから、というのはいは？」

そう訊ねると、ややあつて返事がやつてきた。

「確かに、親族のことを思い浮かべながら、この小説を読んではおりました。たとえば、ウルスラ・イグアランは、大伯母と似ているな、だとか、娼婦として男から金を奪い続けた彼女が過ごした青春時代も、どこかブエンディア一族の歴史に似ている、と。陸山さんのおっしゃる通り、だから私はああいう解釈をすることが出来た」

だから、という言葉が再び発せられたが、それは陸山の疑問には答えていない。しかし、向こうの声が発せられるたびに内側にこもつていくのを感じて、指摘するのはためらわれた。

「僕はピラル・テルネラにも似ていると思つた。二代目の兄弟、ホセ・アルカディオとアウレリヤノ・ブエンディアの子供を揃つて産んでしまふ、娼婦のような女」

そこで話を区切つた。自らの感想が相手を傷つけることになりかねないと意識され

てきて、こう言ってしまうと失礼になるかもしれないけれど、と付け加えたところ、「いえ、失礼ではないですよ」と強い口調が返ってきた。「初めに断わりましたけど、私は娼婦であった大伯母を誇りに思っておりますので」

「そうだったね」呆れが表れないよう注意しながら言った。「そういえば、ピラル・テルネラは、ホセ・アルカディオとの間に生まれたアルカディオに求愛されたけど、近親相姦であるために断って、別の女を仕向けるシーンがありましたね。あれも『横を向いたまま』に出てくるシーンと似てるな」

「……『横を向いたまま』にそんな話はなかったと記憶しています」

思わず、えっ、と声を上げたが、紗江の言う通りだった。「横を向いたまま」に、そのようなエピソードはない。陸山は他の小説と混同していたのだ。新田が学生時代に書いたという、未だ原稿を読めないままでいる小説と。

「そうだ、あれからあの小説の情報を新しく得たんだった。娼婦のような女の子と出会う前に、主人公は友人から紹介を受けていたんだそうです。こんな女の子がいる、という感じで。もしかしたら、その友人もまた、女の子と寝ていたかもしれない、というのが読んだ人の意見でした」

話し終えると、また沈黙がやってきた。慌てて一息に説明したために話が呑み込まないでいるのかもしれないと察して、他の情報も補足としようとしたが、沈黙は紗江

によつて破られた。

「……どうしようもないですね、あの男は」

沈んではいるが、確かに憤りが読み取れる声だったので、陸山は用意していた言葉を飲み込んだ。これ以上情報を与えてしまつては、雰囲気がより悪くなつてしまふかもしれない。かといつて、他に手だてもなかつたので、今度は陸山から沈黙を作らざるを得なくなる。その沈黙は、再び紗江によつて静かに破られる。

「その小説はやはり実話ですよ。彼の体験したことを素材にして書いている。しかも、別々の体験を組み合わせながら、自らの引き起こしたことを等閑視するかのようになっている」

一つ一つの音は変わらず明瞭に発せられているから、注意しておらずとも聞き取ることができた。その明瞭さの具合は、剣呑な雰囲気が流れるきつかけを作つたのは間違ひなくお前であると、陸山に宣告を突き付けるのには十分すぎるほどであつた。

途端に、主人公に対して娼婦めいた女を紹介した友人こそ、新田なのではないか、という大瀬良の推測が思い返されてくる。それも教えることなく飲み込んだ。推測を建てた本人にしてみれば、素朴な考えに過ぎなかつただらう。実際、陸山も聞いている間はあるべき推測であるただけ受け取つていた。しかし、小説に書かれたことが実際に起きたことであると強調する人間の前に、そうした助け船を差し出してしまう

ては、いよいよ新田の弁護をする資格はなくなるだろう。それを恐れて、あくまで相手から情報を聞き出すことに決めた。

「……そこまで恨みを買うような真似をしたんですか、新田さんは」

「学生時代に交際していた女性を妊娠させたにもかかわらず、墮胎させているんですよ」

その声は滑らかに発せられたため、初めは意味をつかみかねた。

「墮胎？」

そうした繰り返しも、意味を把握し直すための作業だった。間もなく言葉の重みが意識されてきて、そんな、と不意に出た声とともに困惑がやってくる。

「彼から、大学を退学している、と聞いていなかっただけでしょうか？」

確かに聞いていた。しかし、陸山が聞いていたのは四年経っても単位が取れなかったから辞めた、という話だけだった。

「単位が取れなかったのは事実です。三年の後半でしょうが、彼は途端に大学に姿を見せなくなりました。演習も卒論も履修しなかったから、そのまま退学した。大学生活に飽きてしまったのでしょうかね。けれど、それなら四年になる前に辞めるべきでしょう？ 彼は豪農を祖先とする名家の出身でして、親からの支援を頼りに一年間、大学に居座っていたのです。墮胎のための治療費も親から出してもらった」

次々と繰り出される情報の速度に、陸山の耳は追いつききれなくなっていた。いつしか紗江の口調が、あのまくしたてるような不気味な色を帯びていたことも、置き去りに拍車をかけていた。

「山形に戻らず、仙台に留まり続けているのもそのせいです。地元でもそれなりに知れ渡ってしまいましたから。とはいえ、ほとぼりが冷めたら戻ってくるでしょうね。おそらく、家族のコネを利用して、それなりの職に就くかもしれません。まあ、作家になる可能性も残っているかもしれませんが……そもそも、大学を中退して、フリーターとして生活しているにもかかわらず、作家になろうとしている、とは随分悠長な態度だと思わないですか？ その悠長な態度がどこを出自としているか、考えたことはないですか？」

相手からの質問に陸山は答えられずにいた。とはいえ、向こうの口調はこちらに対して答えを求めるものではない。憤っているような口調も、通話している相手に対して向けられているのではない。いずれも、この場にいない人間に向かって表された口調だった。

「……申し訳ありません。こんなことを陸山さんに向かって言っても、しょうがないですよね」

紗江自身がそれを自覚した。加速し続けていく暴露がようやく収まってくれたのを

感じて、陸山は胸をなでおろした。

「にわかには信じがたいことです。しかし、あなたのほうが近くで新田さんを見てきているんですから、きっとそれは事実なんでしょうね……」

形式としては相手を尊重する態度を示しておいた。とはいえ、近くににいるからなんだというのだろう、という反発がぬぐいきれないのも事実だった。一年という短い期間の付き合いではあるが、新田はそんな過去があるような態度はうかがわせなかった。いかに顔を見せない付き合いだとはいえ、隠せるほど狡い人間だったというのだろうか。陸山は、自らの眼力のなさを突き付けられた気分になった。

「紗江さんは、それをいつ知ったのですか？」

そうした質問自体に意味はない。それで事実かどうか確かめられるわけでもなかった。ただ、沈黙してしまうことで、自分の無力が証明されるような気分がやってくるのを避けるための質問だった。

「間もなく卒業する、という時期でしたね。酒の席で、近頃新田の姿が見えない、という話題になりました、そこからそうした話が出てきました。私も初めは疑ったのですけれど、後日件の女性と出くわしまして、事が事でしたから直接には触れなかったのですが、本人も新田の話題を避けていました。後に彼女は休学しまして、そこで確証を得た。ただの色恋沙汰で、そこまで行き着くわけではないですから」

紗江の口調は元の落ち着いたものに戻っていた。とはいえ、折り目正しく経過を報告する様子は話題に反しており、かえって、あくまでも冷静にふるまおうとする抑制の力を感じさせる。

「それ以降新田さんとは会ったんですか？」

「一度だけ。その時は彼を咎めようと思いました。ただ、彼は黙っているきりで、私の言葉に対して何一つ応えようとしなかった。目を伏せるでもなく、顔を反らすでもなく、声を荒らげる私の様子をじっと見ていた。思わず手が出そうになりましたが、そこが人前だったこともありましたので、踏みとどまって睨み付けた末にその場を離れた。今から思えば手ぬるかったですね。人目につかない場所に追い込んででも、彼に一撃を見舞うべきだった」

過激な言葉でさえもさらりと云つてのける。そうした態度に陸山は違和感を覚えた。しかし、新田の過去がこちらには容易に測れないのと同様に、紗江の心境もまた容易には測れないのだろうと踏まえてみると、安易に口を挟むのはためらわれた。

そのように当人だけが知っている事柄に口を出せないでいると、傍観者としては付度を拒まれているような気になり、本来なら事実の想像へと向かうべき思考が、あらゆる方向へと進路を変えていく。もしかしたら、墮胎したのは紗江ではなかったか、と。そもそも他人のことに對してここまで憤慨出来るのだろうか。陸山が傍観者として、

新田にまつわる事どもに対して距離を置いて接さざるを得ないのと同様、紗江もまた幼馴染に対して少なからぬ冷淡を示していいのではないか。にもかかわらず憤懣を表そうとするのは、紗江が実のところ新田の子を身ごもったからではないのか。

しかし、それは明らかに思いつきの妄想に過ぎない。あるいは、虚構にありがちな展開を、現実そのまま当てはめるような振る舞いである。固有の出来事に対して、類型を当てはめて理解しやすくしようとする。傍観者として冷淡に事に接しているだけであって、当事者の心情をなんら汲もうとしていない。それは人間としては言わずもがな、小説の読者としても失格と言える態度だろう。そのように思考に向かつて自粛を促しはするが、一度踏み入れた虚構の領域からはなかなか抜けられず、次第にまた新たな妄想が浮かんできた。

「そうか、新田さんが『横を向いたまま』から自らの影を消そうとしたのは、過去に引き起こした罪がささやかれ続ける世界を無効化しようとしたからなのか」

不用意なつぶやきだった。しかし言葉に出してみると、それはある程度もつともらしさを帯びた推測ではないか、とも思えた。そうした実感が、紗江に対する推測が妄想であったのと同様、新田に対する推測も妄想である、という等値を阻んだ。

「他にも様々な事情が絡んでいると読んでいますが、大学時代に書いたという小説のことを鑑みれば、その推測は的を外していないと思います」

そうした肯定も想像をたくましくさせた。

『横を向いたまま』では、同じ土地に暮らす人々が、お互いにまつわることで知らない話はないという世界が描かれている。そこから、新田さんは自分の影を消して、そうした噂話に塗れた世界から抜け出そうとしている。では、学生時代に書いた小説は……」

「彼は墮胎させた女性に対して、病院を紹介するにとどまらず、精神的なケアを施してくれる男の友人も紹介していたのです」

新たに知らされた事実の意味を、またも陸山はつかみかねた。

「紹介したといっても迂遠な形ではあるのですが。彼女の同性の知人を介して、その男を引き合わせた。それは上手くいったようで、一年の休学を経て、現在彼女は復学しております」

「……でも、だとしたら娼婦のように描くというのは納得がいかない。まさか、自らが墮胎させた女性を、娼婦であるとするだなんて」

「十分にあり得る話ですよ」紗江は語気を強めて陸山を遮った。「何の呵責もなく、世間の耳目を惹く作家になろうとする男です。かつて孕ませた女を、男を誑かす娼婦である、と定義するのは迷いなく行えることでしょ」

迷いなく、という言葉が、再び新田の声を呼び起こさせた。部員たちが一つの話題

を巡って議論している最中、出し抜けにアフロリズムを繰り出すように物事を即断する声が響くことが何度もあった。それは紗江の推理の裏付けをするには十分な想起だった。

その上で紗江に対しては反論したい気持ちも残っていた。もともと、それは相手の説を覆すためのものではなく、むしろ補強するための反論である。

妊娠したのがあなただと仮定しよう、学園中の異性をたぶらかす女のモデルもあなただった、だとすればモデルが二つの意味で一致することとなる、学園で娼婦のように振る舞う女性と、かつての想い人から別の男性を紹介される女性、この仮説が正しいとすれば、新田が小説を書いた動機としては申し分ないものとなるのではないか

「小説というのはそんなに容易く書けるものでしょうか。いかに実体験をパラフレーズするとはいえ、自らの罪の意識を馴化させるためとはいえ……」

そうした判断の留保は、陸山自身の妄りになる推測にも向けられていた。紗江にそうした過去があるとして、別人の話であるかのように語っていると、見ず知らずの人間に対してあけすけに語るのは、やはり疑わしい部分が残った。

「ただ、私には最早そうした推測しかできなくなっております。あまりに材料が揃いすぎています」

また落ち着き始めた様子から、陸山は彼女達の過去を思いやった。幼馴染特有の面映ゆさゆえに会話を交わすことは少なくなっていたそうだが、そう断るからには幼少の頃にはそれなりの交流を持っていたのだろう。そして、大学に入るとお互いが造詣を深めていくこととなる文学を介して、切れかけの交流をどうにか保っていた。もしかしたら、そこには旧交を取り戻すかのような語らいも存在していたかもしれない。そんな折、新田が不実を犯すこととなる。陸山も信じがたさは感じていたが、紗江の方こそ、より強い受け入れがたさを感じていたはずだ。そうした比較を通してみると、傍観者としては自らの無力を感じざるを得なかった。

「……申し訳ないけど、僕にはもう扱いかねる話だ。新田さんは音信を絶ってしまっている。完全にプライベートの世界に隠れてしまっている。本人に訊こうにも、彼から窓口を閉めてしまっている。ネット上でだけつながりを持っている人間としては、それ以上踏み込みようがない」

無責任ともいえる態度ではあったが、対応の仕方が浮かんでこなかったのも事実だった。そんな中で不義理を犯すまいという呵責だけでもって事に当たろうとしても、足手まといになるのは明白だ。

「新田はこれから、そちらではどのように遇されていくのでしょうか？ 一方的に彼の過去を暴き立てた人間が、案じるのはおかしいかもしれませんが」

「僕は責任者ではないから、この場では何とも言いようがない。ただ、もう一か月以上姿を見せないからには、新田さんは自分から文芸部を離れていくことになるのかもしれない」

それは半ば願望が込められた予想だった。これまでの活動を通して、新田が Twitter 文芸部に対して及ぼした危害はないに等しい。でなければ、何事もなく活動を続けられるはずがない。その点では、新田を文芸部から追い出す口実はない。

第一、これまで話された事実を打ち明けたところで、部員は陸山と同様に受け止めかねるあまり答えに窮してしまっただろう。ネットサークルの特徴には、私生活に踏み込まない気安いコミュニケーションが挙げられる。それに同意した上で各々が活動を行っているというのに、今更この部員は私生活に問題があるから排除しよう、という話は出来ない。

そうであるからには、このまま新田が姿を見せないまま、全てがなかったことであるかのように沈静化してくれるのが望ましい。

「もしかしたら、新田さんはあなたが僕にコンタクトを取ったことを、何らかの形で知ったのかもしれない。そこで自分の評判が悪くなるのを恐れて一時的に姿を消している、あるいは、もう姿を現さないと決心したのかもしれない」

以前打ち消したはずの推測が、今度は声として現れた。

「あり得る話です」そこで間が置かれた。しかし、それにしては長い間だったので、紗江自身も言葉に窮しているのがうかがえた。「だとしたら、これ以上私が新田の消息を尋ねるのは、そちらのご迷惑になるのでしょうか……いえ、迷惑は最初から明らかでしたか」

「そんなことはありません。あなたの義憤はよくわかります。最初は一体何に怒っているのだろう、なぜ事情を明らかにしないのだろう、と思ったけれど、あなたも証拠が一通り揃うまでは新田さんを信じていたのですね」

「信じていた」という繰り返しが聞こえてきた。その後、苦笑が響く。「やはり文学に通じている方は心情を読み解くのが上手いのですね。そんなことは、一度だって考えたことがなかった。私は、怒りに任せて新田の罪を暴こうとしていたつもりだったのに」

謙遜はしているが、実際のところ、こちらの事情もよく忖度しながら話を続ける態度に落ち度はなかった。

「ただ、新田さんが戻ってくる可能性はゼロではありません。戻ってきた際は、ちゃんと彼と話し合いたいと思います。あなたと直接話すのは難しいでしょうから、仲介役が必要でしょう」

かといって、新田が現実の人間に対して、あるいは小説に対して取るような問題的

な態度に解決策があるのかどうか、思い浮かぶアテは依然としてなかった。それでも以降のサポートを約束しようとしたのは、顔の見えないやり取りの中で最大限の誠意を見せようとしている女に対して、少しでも返礼をしたいと思っただけだった。

「ありがとうございます。けれど、あくまで姿を見せたとの報告だけ寄越していただければ結構です。一通りの情報は得られましたので。あの男に自らの罪を突き付けるのは、私の役目ですから」

静かに発せられた最後の言葉に潜む強い決心を察して、陸山はやはり自分が傍観者ではないことを悟った。

「わかりました。けれど、一人で思いつめないでください。それぞれの都合がよければ、また文学の話でもしましょう」

「そうですね。お忙しい中、お時間を割いていただきありがとうございました。それでは、今日はこのあたりで」

ええ、また、と応えたところで通話は打ち切られる。陸山は最後に自分が残した言葉を再び頭にめぐらせた。また文学の話をしましょう。そもそも今回の通話も、ガルシア＝マルケスの『百年の孤独』をめぐって始まったのだった。今や新田にまつわる話によって印象が薄れてしまった、お互いがそれぞれの解釈をぶつけ合わせながら新たな認識に至るための話し合いを、もう一度濃やかにするために陸山は大部の書籍の

ページをめくつた。間もなく、ピラル・テルネラが私生児であるアルカディオからの求愛を跳ねつけるエピソードに行き当たつた。

ピラル・テルネラが実の母親である知らないアルカディオは、この老いた女が誰とでも寝る女であるということは知つていて、待ち伏せしてハンモックへと連れ込もうとする。しかし、ブエンディア一族の始祖ウルスラが固く取り決めた掟である、近親相姦の禁止を心に刻んでいたピラル・テルネラは、誘いを振り切つて別の女をアルカディオに引き合わせる。アルカディオとの間に二人の子供を産むこととなるサンタ・ソフィア・デ・ラ・ピエダには、老いた女の全財産の半分が与えられていた。もう半分は、彼女の両親の手に預けられた。

金によつて娼婦の代役を引き受け、夫アルカディオが戦乱の最中に処刑されたにもかかわらず、サンタ・ソフィア・デ・ラ・ピエダはブエンディア一族に仕え続けることとなる。しかし、家屋や家族が徐々に衰え、どれだけ意を尽くそうとも維持することが困難になり、自らの無力を突き付けられた時、彼女は誰からも見送られず失踪する。

その失踪後も、ピラル・テルネラは生き続けており、かつて二代目の兄弟達を誑かした時のように、私生児の性欲の標的になつた時のように、マコンドの街中を浮浪し続けていた。そこでブエンディア一族の滅亡のきつかけとなる、玄孫のアウレリヤ

ノ・バビロニアと出会うこととなる。叔母のアマランタ・ウルスラへの届かない愛を嘆いて、玄孫は高祖母に泣きつく。家にこもりきりで童貞のまま成長し、遅まきながらの性の目覚めに苦しむ青年に向かって老婆は、心配しないでいいよ、今どこにいるか知らないけど、相手はちゃんと待ってるから、という曖昧な答えだけを与える。かつてはトランプ占いを得意とし、胡散臭さを撒き散らしながらもあらゆる未来を予見しえた女には、最早往年の千里眼は備わっていなかった。彼女から与えられた言葉を愛の成就の保証であると受け取ったアウレリヤノ・バビロニアは、果たして叔母と体を交わらせ、奇形児を産むこととなる。ピラル・テルネラは、かつて自らが固く守った掟が破られた証明を見ないままこの世を去った。

一通りのエピソードを確認した陸山は、この小説が複合的に成り立ったものであるという自分の認識が間違いでなかったと思った。かつて遠ざけたものが、まわりまわって姿を現して、再び危機をもたらす。その危機と対峙するのは、時に本人でもあるが、時に子孫でもある。あらゆる場所、あらゆる時間において、かつて起こった出来事と似たような出来事が起こり、繁栄もしくは滅亡の分岐点が作られる。

小説は現実の事柄を引き写すことによつて紡がれるものであるが、時として優れた小説はその後の現実のプロトタイプとなる出来事を生み出している場合がある、だとしたら今自分に襲い掛かっている出来事もその一例なのではないか、と陸山は思った。

ひよつとしたら今日交わされた文学談義は、かつて新田と紗江の間で交わされた文学談義をなぞるようなものであったかもしれない。大学時代は幼少の頃の交流をなぞるような、共通の趣味をめぐってお互いがお互いの心の内から言葉を誘い出すような語らいが存在していたかもしれない。あるいは、それぞれの文学観を成熟させた先には、今日陸山が代役となつて為されたような文学談義が存在していたかもしれない。『百年の孤独』をめぐつて、お互いの生地と似たような環境にある土地について書かれた小説をめぐつて、彼らは自らの過去に向かつて思いを馳せながら言葉を交わしていたかもしれない。

だが、それは新田自身の無責任によつてありえないこととなつてしまった。『百年の孤独』をめぐつて為された会話の後に繰り広げられた暴露話もまた、本来なら新田が聞くべき事柄だったはずだ。しかし、彼はそれを避けた。一度目は別の男を引き合わせる事によつて、墮胎を通じて精神的ダメージを負った女に癒しを与えたという。では二度目は、紗江については、殴りかかつてでも罪を突き付けなければならぬとまで恨んでいる幼馴染からの逃避については、ネット上で出会つたに過ぎない人間に責任を押し付けようとしているのだろうか？ かつて小説の中で書いたように、厄介な女を別の男に引き合わせる事によつて害の薄い人間に仕立て上げようとしているのだろうか？

文学談義にまつわる反復ならばいくらでも引き受けることができる、と陸山は思った。実際、紗江との文学談義を通じて、自分の認識は少なからず変容してきている。それが良いことか悪いことかは未だ判じかねるが、これからの人生において欠かせない認識になるかもしれないという予感も現れている。そして、それは新田の存在なしにはあり得ないことだった。新田の存在なしには、紗江と出会うこともなかった。

しかし、後者の反復については、不義を犯したことで襲い掛かってくる糾弾の反復については、到底引き受けることができない。『百年の孤独』ならば、血は争えないという紋切型ではあるが抗いようもない認識によって受け入れられるかもしれない。だが、あなたとの間には血のつながりはおろか実生活におけるつながりさえもない、と陸山は目の前にいない男に対して強く訴えかけた。確かに先程は協力を約束したが、それはあくまでも彼女の人格に対して敬意を表明しただけであって、あなたに対して協力を表明したのではない、と自らの判断についてまわるだろう誤解を取り除こうとした。

とはいえ一方で、と陸山は思考を別の方向にめぐらせた。実生活におけるつながりが無いのであれば、紗江の暴露が真実であるという保証もないままだろう、と。協力を約束した背景には、新田が改心するだろうという見込みもいくらか含まれていた。そしてそうした同情心は、新田はそういうことを仕出かす人間ではない、という思い

も内包しうるくらいの大きさは備えていた。

一通り考えをめぐらした末に袋小路に至りついてしまったのを悟って、陸山は時計を見た。気が付けば日が変わっている。これ以上ネット上の事件にかかずらってしまつては、実生活に支障が出るのは明らかだ。陸山はパソコンをシャットダウンし、就寝の準備に取り掛かった。シャワーを浴び、寝巻に着換えて、ベッドに身を横たえる。一連の動作をこなしている間、くれぐれもネットにまつわる話は頭に上らせないようにした。目をつむっている間も、翌日自分がこなさなければならぬ仕事について考え続けていた。一通りのスケジューリングを済ませても尚寝付けなかったから、今度は温めている小説の構想を改めて練ろうとした。モチーフにしようとしている外国の歴史や土地柄について整理し、その中で活動する登場人物達はどんな性格を持つべきだろうと思案していると、間もなく心地よい睡眠が訪れた。

陸山が編集長を担当した『Li-tweet』は何事もなく発刊された。原稿の漏れもなく、校正も滞りなく行われ、予定期日までにすべての作業を終えることが出来た。

「いやはや、お疲れ様です」

Twitterで発刊した旨を告知し、一段落が付いたところで大瀬良がねぎらいの言葉を発した。

「大瀬良さんこそ。毎度厳しいスケジューリングで申し訳ないです」

陸山がそう返したのも、雑誌が企画されるその都度編集部員が変わっていく中で、大瀬良だけが毎回すべての原稿をPDFにまとめる作業を担当してくれていたからだった。

「いやあ、初めの内はともかくとしてももう慣れたもんですよ。それに最初は上総さんに頼りきりで、何にもやってないも同然だったしねえ」

「ああ……否定できないところです」

含み笑いをした上総の声が高く響いた。控えめながら、皮肉は確かに込められている彼女の言葉に部員たちは一斉に笑い出した。

「実際今回も助けられなきゃならなあ、と思つとつたんですよ。原稿が多かったからね。でも、なんとかなった。これからは大丈夫です」

「一人でやれるよ、って自信満々に言う子供みたいだね」

流川が言うともまた笑いが起こる。標的にされた格好になる大瀬良は、それも最年長の役目だと言わんばかりに、怒りもせず話を引き継いだ。

「まあ、上総さんがいなくなる前に引き継ぎは済ましとかんたらねえ。送り出す人間としては心配いらんよ、っていうのは当たり前でしょう」

「すいません、本当に。私情で部に迷惑をかけてしまつて……」

やや震えた声で申し訳なさそうに言う。彼女は私生活の都合から『Tweed』の発刊前に休部を申し込んでいたのだった。

「所詮こっちはアマチュアの集まりなんだから、私情の方が大事ですよ。免許取るんでしたっけ？」

「はい。山形の方にまで」

「でも、関東で暮らす分にはそこまで車は要らんのじゃないですか」

「そう思って今に至るんですけど、意外とそうでもないんですよ。それに、転職にあたって、選択肢は増やしておいた方がいいと思ひまして」

「ふうん……しっかし、東京の鉄道網は旅行するたびに苦勞させられるけどね。あんなだけ電車がつながってればいけんところなんてないように思うけど」

「凄いですよねえ……私も初めの頃は本当に苦勞しました」

「オフ会で東京に行った時も苦勞した。新田さんと同行したんだけどね、私が愛知であの人が宮城だから、半端な都会人同士が寄りあうと余計面倒なんだわ。田舎者ならちゃんと立ち止まって考えるんだらうけどね、お互い立ち止まることが恥ずかしいと思つとるんですよ。東京ならともかく、名古屋や仙台で立ち止まると目立つでしょう。だもんで、半端な見当のまま逆の道に行くし、やっぱりこつちだったらう、つて言い出さずにいた見当を今更のように主張し出すと、そつちも間違つとる」

「ああ、わかります、それ」雨野が言った。

「でしょう？ まあ、なんとかなったけどね。新田さんも楽しそうにしとったよ。世田谷まで行く道中で見つけた綺麗な人のことを始終話題に出したりしてね」

「意外だね。あんまり女には興味がない人だと思ってたけど」流川が言う。

「そりゃ流川さんに比べたらね」と大瀬良は冗談交じりに返した。「そういや、新田さんは山形が地元だって言っとったね。意外と会えたりするんじゃないの」

「そういえば、結局新田さんとは連絡がつかなかったんですか？」

そう訊ねる上総だけが、ここに集まっている中では、唯一紗江の存在を知らない部員だった。ああ、そうだね、と大瀬良が間を作る内に流川と雨野は黙ることとで各々の立場を表明しているようだった。一時的ながら部から離れる人間に、込み入った事情を話しても意味がないことだ。一通りの文脈を踏まえて、陸山も彼らと足並みを揃えることにした。

「案外、山にでも籠ってるんじゃないの。山寺とか行って、俳句に目覚めたりしてるかもしれない」

「だよね。そっちの方が似合うよ、あの人」

親密に交友を交わしている二人としては、いつもと変わりないやり取りだったので、冗談で紛らわそうという態度は微塵も感じさせなかった。実際、二人としてもその程

度の誤魔化しなら造作もないと思っていただろう。彼らは新田の過去を知らないのだから。

いかに新田と馴染みのある人間がやってきたとはいえ、所詮は個人間のいざこざに尽きるものであって、こちらは橋渡しくらいのことをやればいいのだろうと思っ
ているからこそ、彼らは渦中の人間を軽く話題に上らせることができる。実際、陸山が同じ立場に立っていたとしたら、彼らと同様の態度を取っていたらうから、口は挟みかねた。

加えて、新田の過去を明らかにしたところで、そうした事実が彼らに対してなんら影響を及ぼすものではないし、ネット上の付き合いしか持たない人間として出来ることはほとんどないに等しいのだから、陸山としては話題が尽きるのを待つほかなかった。

「で、どの辺まで休むの、上総さん」大瀬良が訊いた。

「転職して軌道に乗ってようやく、と言うところですかね……」

また申し訳なさそうな震え気味の声が響くと、ええ、という大瀬良の煽り立てるような声が重なった。

「そんじゃあツイ文が無くなってもおかしくないよ」

「さすがにそこまでは残ってるでしょ」流川が口を挟んだ。

「せめてツイ文が無くなる前には帰ってきてくださいよ。こつちとしても浦島太郎みたいな立場に置かせるわけにはいかんからね」

「はい、くれぐれも気を付けます」

半ば理不尽な要求を突き付ける大瀬良に、上総は苦笑しながら応じた。

一度目の技能教習を終えて、待合室の長椅子に座り一息つくと、上総は自分が山形に来て以来初めて深い息をついたかもしれないと思った。

見知らぬ土地に足を運んで数日間を過ごすというのはこれまでも何度か経験したことだが、大抵が観光のための旅だっただけあって、気楽さが大勢を占めていた。大體、観光にあたって自分の身分は半ば忘れられる。見知らぬ土地に移れば、普段自分を規定している職業やら経歴やらは一旦切り離すことができる。ただ今回は、免許という自分の能力を規定してくれる資格を得るための旅だった。見知らぬ土地で、自分がこれまで知らなかった技能を手にする。先程まで隣に座っていた、年配の男の教官の呆れたような態度を併せて思い返しながら、彼女は今更のように今回の旅の難しさを確認した。

確かに今更ではあるけれど、と上総はすぐさま自分の遅まきながらの自覚を弁護した。乗り換えなしの新幹線に乗ったこともいくらか影響していた。東京に比べれば都

会性の薄い地元から新幹線に乗って、道中は本を読んで過ごし、気付けば目的地に着いていて、駅を出ると古びた街並みが待ち受けていた。駅から続く一本道は視界が開けていて、四方八方を山に囲まれた盆地らしく小高い山と晴れた空が見えた。立ち並ぶ家々もことごとく古びていて、下ろされたシャッターは茶色く錆びており、所によつては塀が崩れていた。むろん人通りはおろか、車通りすらまばらだ。自動車学校からの送迎バスは、信号以外で立ち止まることがなかった。

そんなこれまで見たことのない風景をどうにか自分のものとしなければ、これからの半月は送れないだろう。教官の訛った声も、取り込まなければならぬものの内に含まれる。そんな中、待合室に座って、ようやく風景からも人からも切り離された一人の時間を持つことが出来た。そこでの一息は、これまで体験した諸々を一旦外側に押し出して客観視することで、自分を保とうという仕草でもあった。

とはいえ、それもわずかのことだ。一五分の休憩の後、次の教習が待ち受けているのだから、あまり振り返っているわけにもいかない。時計を見ると、時間が迫っていた。

「上総さん、いらっしやいますか？」

出口の方で若い女性の声で聞こえ、また息がつけた。どの道教わる立場なのだから恐縮はしなくてはならないのだが、相手の年齢が近い上に同性だというなら、気の

置ける部分は少なくなる。

はい、と立ち上がって手を上げると、向こうの方から近寄ってきた。こちらから近づこうと思っていた上総は、動かしかけた踵を一度地面へと戻した。

「担当の押切です。よろしくお願いします」

左胸のネームプレートを示しながら会釈をする相手に、こちらこそ、と頭を下げた。頭を上げると、こちらを真っ直ぐに見つめてくる女の目があつた。

「エンジンのかけ方や、発進の仕方は教わったと思うので、次は実際に走らせてみましょう。といっても、一周をゆっくりと走るだけです。ご安心ください」

先程の男の教官とは違い、次にやるべきことをしっかりと伝えてくれる姿勢に思わず背筋を正された。明瞭に発せられる言葉といい、眉毛のところを切りそろえられた前髪から覗く切れ長の目といい、自律したところを感じさせる女性だった。何より、訛りのない声の上総に気後れを覚えさせた。

「上総さんは関東からお越しになったのですね。どうですか、山形は。何にもないでしょう？」

手元の資料に目を落としながら、こちらへ視線を送る事を忘れずに話す相手の態度は、これまで会った教官とは違っていた。人の好きは感じさせるものの、どこか無造作なところのある、地元特有と思しき立ち振る舞いを彼女は見せない。

「それはまだ何とも。下調べをしたら名所がいくつかあるようなので、これから探そうかと思えます」

「そうですね」と相手は微笑んだ。「では、参りましょうか」

そう言つて歩き出した彼女の後ろに従いながら、地元の人ではないのだろうか、あるいは、一度他所に移り住んだことのある人かもしれない、と推測を付けつつ、後れないように足並みを揃えた。仮に遅れてしまつては、自分こそ田舎者であると証明されるのではないか、という弱いながらの強迫観念が上総の頭に上り始めていた。

一度目の教習で教わつた通り、周囲を確認し、ドアを開けて運転席へと乗り込む。そうした上総の動きを、すでに乗り込んでいた女は頷きながら確かめていた。シートやミラーを調整し、シートベルトを締める。

「では、確認の意味も込めて、エンジンをかけるところまでお願いします」

相手の促しに応じて、クラッチとブレーキを踏んでキーを回した。金切り音が高く鳴り、軽く車体が揺れる。

「大丈夫みたいですね。では、今回はあのコースを走っていただきます」

そう言つて運転席側の窓を指したところには、すでに一台の車が走っている楕円形の模擬道路があつた。

「まずは一周。ゆっくりでいいですから、エンストだけに気を付けて走ってみてくだ

さい」

そう言うとお上総から目線を外して、女は前を向いた。肩のところできりそろえられた髪が頬に重なって、目を隠す。そんな彼女と視線を揃え、固くなっていた姿勢を和らげる隙を得たように感じたお上総は、ネームプレートに記された「押切 紗江」という名前を思い返しながら、どこかで見覚えがあるのだけど、と記憶のより深くの方へ手を伸ばしていった。

〈次号に続く〉

合同教会の人びと（第四回）

小野寺那仁

昼からは黒雲がせり出してきて、天候は不順になった。ときおりみぞれまじりの雪が痛いほど顔に当たるようになった。初心者と思っていたあきなはかなり上達してきたらしかった。ひとりりで滑りたがるのでそのままにさせる。あおいは疲れてきたのか、もともとの性質なのか滑るたびに無口になっていった。それから表情が硬くこわばってきて仏頂面のままでいることが多くなった。いや機嫌が悪くなってきたのは何度か、木島とめぐみがモーグルコースを目にも止まらぬスピードで滑走するのがリフト待ちの丘から眺めることができて心から楽しむ彼らにさまざまな意味で嫉妬していたのかもしれない。めぐみは体格もよくてさばさばしててそばかすがあおいよりも多かったけどそれさえも愛嬌に変えていたのだった。木島が気に入っているのもうなずける。ただ再婚するのかというそれはどうかはわからなかったが。

静間は疲れてきたので少し休むことにした。グレンデから離れて丸太を組んだ真新

しいロッジに立ち寄る。あおいはあきなとリフトに乗ることになった。あおいと話すのが億劫になってきた。あおいの話はネガティブであったのと静間が既に独身が長すぎて女性に対してそれほどにめり込むようなこともなくなったのと人間関係の込み入ったことにつきあえなくなったことからだった。職業柄なんだろうか、他者からの要求に対して過敏になってしまう。この場合は合同教会の高橋侑なのだが、どうにも彼のが気になって仕方なくなってきたからいきおいあおいの話には少しばかりうんざりし反発さえ覚えるのだった。欲望のベクトルで言うると合同教会に興味を持つ静間と教会から離脱したいあおいとでは方向が逆なのであった。

ロッカールームでゴーグルを外した時にあおいはいきなり言う。

「合同教会のパーティーに行った方がよかったんじゃないですか？」

「どうして？」静間は答えたが、それに対しての答えはなかった。あおいは愛想笑いも浮かべなかった。静間には多くのことが謎めいていた。そうなのだ。俺は無理やり連れてこられたのだった。あおいにとっては無理やりであっても教会よりはスキー

のほうがいくらかはまじだったのだろう。

そうして静間たちは別れた。あきなの背中には澁刺としていた。

静間の中にはしこりが残った。あおいの言葉が気になった。帰宅途中の渋滞の車内で漏れるような声で静間は教会の人たちに似合っている、みたいなことをなにげない会話の中で口にした。それには木島も同意してうなづくのだった。そればかりか高橋侑のことをさらに持ち出してブログぐらいは読んであげたらと薦めてくるのだった。読むつもりはあったのだがその場では即答を避けた。

だが自分の部屋に戻ると暖房も入れずに真っ先にパソコンで侑のブログを検索していた。

それは合同教会の公式ブログと同じアドレスであった。つまり彼は広報担当なのである。コメント欄から先に読むとひどい中傷と批判の渦であり、よくもまあこれだけ悪口を言われ続けているのにブログを続けていられるのだと妙なところに感心する。合同教会の長老はゼーベルク師というらしい。この人は侑の紹介で一章を割かれ

て詳しく記述されているのだが、当のゼーベルク師から事実無根であるとコメント欄では否定されていて、そもそも合同教会のブログは世に存在せず、使徒を名乗る高橋侑は異端も異端、合同教会の問題児であると揶揄されている始末だった。それにはさすがに侑も反論していてコメント欄で「このなりすましめ、長老はパソコンを使えないし日本語もできない」と言っていた。そこから延々と果てることのない言い争いが続くわけだが、静間はこちらは読まなくてもいいだろうと思いついで途中で切り上げることにした。では、肝心の本文にはどういう記載があったのか、覗いていくことにしよう。

ようこそ合同教会へ

合同教会とはさまざまな宗派を超えて真の信仰の有り方を見つめ直す教会です。かつては日本基督教団に属していたこともありましたが、現在は解消されています。また、昨年まではカナダ合同教会の分派と位置付けられていましたが、ネット社会を迎

えてネット上での見解の相違が明らかになり、カナダ側より留学生の交換や教父の派遣などの交流拒否事件が起きたために二〇一四年現在では関係性は名称の類似のみにとどまっています。日本では、岬町沖津島三〇五番地、スーパーシマツ敷地内の一か所のみが活動となっています。

合同教会とはいえ既存の教会とは一線を画しているために個人はほとんどいかなるキリスト教の分派にも属していないと言った方がいいでしょう。私たちは正当性などは求めてはいません。合同教会の特色はただひとつしかありません。自由です。日曜礼拝や聖書精読やゼーベルク師の説教などは教会ですからむしろあるのですがそこにはいかなる強制力もありません。信者でなくても自由に出入りできます。そして、これは画期的なことであると私たちはひそかに考えているのですが、あらゆる行事参加費用は無料です。信者であることを辞めてしまう大きな要因のひとつにはキリスト教団には金がかかるいうことがあるのですが、寄付は完全に自由です。

それから毎年数組は行われる結婚式は有料になります。(わずか一万円)

なぜそんなことが可能であるかというところ（以下数行削除されている）

とはいうものの合同教会は改心した（または削除）重度の患者、土地を失った農民、漁場を失った漁師（多くはそうであるが）ばかりではなく、近年はネットの普及もあって各地の哲学者や神学者、聖書にまつわる様々な研究者、大学生、果ては左右の政治団体にも関心を持たれています。彼らはネット神学生といわれていてほとんど教会に顔を出すことはありませんが、別サイトの合同教会神学生サイトには夜毎現われ熱い議論を交わしています。ただ私（高橋侑）としては彼らの活動は実存を伴わない亡霊的な活動に過ぎないと思っております（数行の削除）

次に沿革およびゼーベルク師の来歴という項目があるのだがそこはごっそりと削除されているらしく空白になっているが、明らかに高橋侑の個人ブログと思われるアドレスが貼り付けてあった。ここまで読んだ感想は思いのほか、普通の教会ではない

のか、というものであった。もちろん激しいコメントの応酬や削除がまったく気にならないわけではなかったが。数枚の写真もアップされていてほとんどの人が知らない人ではあったが、ロックコンサートの場面では瑠奈先生や葬儀屋も映っていたしころどころにあおいや侑の写真もあった。それは何かサークルのようなものを思わせるのどかさがあったので静間行ってみるのも悪くはないと思いはじめた。ただ侑のブログも読んでみたく思ったからアドレスを辿って行ったがリンク切れになっていた。それを読んでほしかったのだろうか？ それともこの公式ブログらしきものなのだろうか？ よくはわからなかったが、彼のことだからそのうちにはなんらか連絡があるだろうと思ひ、静間は疲れた身体を横たえた。

(第五回へ続く)

瞳子（休載のお知らせ）

常磐 誠

— 相撲は嫌いだ。

— あんなものをありがたがる精神が理解出来ない。

— 強いってことがどういうことなのか知りたいなら、琥太を見れば良い

— にこにこと、へらへらと。

— 琥太が、『強い』……？

— どうせピアノも禁じられたことだ……。

連載『瞳子』第二話「追想劇」は冬号で！

仕事で大阪京都東京と短期的に飛ばされてしまうという事態にあり不慣れな環境な中時間に余裕がございませんでした。今回はお休みさせていただき、次回の冬号に再開致します。楽しみにされていらっしゃる方には誠に申し訳ございません。次回はどうぞよろしくお願い致します。

常磐 誠

記

録

合評会

『Litweet』 2014年夏号

① ホスト…ふかまち 日程…7月27日(日) 21時

The new day 6 22枚

エッセイ 子供の頃には Pさん 13枚

ディスタンスのミズ他 misty 2編

詩3編
る

② ホスト…Pさん 日程…8月17日(日) 21時

詩 訳詩 安部 13枚

小説 ある天気予報士への手紙 76枚 常磐

詩 キノシタとわたし 深街

③ ホスト…日居 日程…8月23日(土) 20時

ビター&スイート 彩 7枚

評論 暴力論 misty 19枚

小説 瞳子 常磐 18枚

④ ホスト：Akira 日程：8月31日（日）21時～

サマザマナラブ 日居 121枚

ガラスの街 misty 10枚

詩 初恋る

編集後記

● 全く関係ない話なんだけれども、最近ヘミングウェイの『キリマンジャロの雪』を読み返した。多分最初に読んだのは高校生の頃だっただろうか、その時はまだ「情熱」が「夢」から乖離していくなんてことを体験したことがなかった、幸せな青春時代だった。

改めて『キリマンジャロの雪』を読んで、甚く感動してしまった。それはとても悲しいことなのかも知れない、とも思った。

● ヘミングウェイの短編小説にはおよそ共感というものが無い、と思っている。もし私にヘミングウェイであり、あのような着想を得たとしたら、きっと、主人公の性格や容貌、心の葛藤、時代性などを織り交ぜて、もつと読者に共感を強いるような、そんなものにするだろうと思う。

● けれどこんなことを考えていた。文学という複雑な混交物から、登場人物への自己投影や、精緻な情景描写、心を舐めるような心理描写を、できうる限りなくしていった果てに、私たちは五感や心ではない、「純文学器官」によつてその物語を受け取ることができるのではないかと。

● 今回のテーマは「文学的虚構を求めて」だった。文学的虚構とはいったいなんだろう、いまだによくわからない。でもおおよそ純文学というものは虚構であるような気がしている、当たり前のことだが。

● 部屋の窓から顔を出して煙草を吸おうとすると向かいにマンションが見える。マンションはコンクリートと鉄筋とガラスと煉瓦で出来ている。けれどそのリアルな物質の群れが果たしてマンションなのだろうか、とか考えている。そのマンションが私に向かつて、自分はマンションである、と伝えるから、それはマンションではないか、とか。ベンヤミンも同じことを言っていた。

ある物事から「リアル」を削ぎ落としていくと、虚構が残る、とか。

● 純文学もまた、余計な贅肉（リアル）をたくさん蓄えている。いや、贅肉が美味だということのほうが多いと思うけれど、その根底には虚構が流れている。

● そんなことを考えていた。

● 話は変わるけど、twitter 文芸部は今「キリマンジャロの凍豹」になっているような気がした。いや、別にそんなことはないか。

Li—tweet 秋号

発行日

平成二十六年十月七日

編集長

る

編集委員

崎本智（6）、深街ゆか

発行者

twitter 文芸部

ツイッターオフィシャルアカウント

<https://twitter.com/twibun>

ホームページ

<http://twibun.jindo.com/>

表紙デザイン

アキラ

まとめPDF作成

小野寺那仁

常磐 誠

本誌はホームページに掲載している「Li—tweet 秋号」をプリント用、電子書籍端末用に編集し直した物です。記事の無断掲載を禁じます。

© twitter bungeibu 2013

Twitter 文芸部